正誤表

前號の栞には誤植が多く申譯がない。大概想像はつくが、誤りは誤りに違ひないから、此際正誤しておく。

頁	段	行	誤	正
一三〇	下	九	天張	矢張
一三四	上	一三	新藥師本堂	新藥師寺本堂
一四三	上	一三	決つた	決つた
一四四	下	一六・一七	知らむい	知らない
一四六	下	一六	第三十九圖の（は時に笈形を説明する記す）	第三十九圖の（は笈形を説明する時に記す）
一四八	上	一六	石上神社攝社	石上神宮攝社
一五〇	下	一	相築郡	相樂郡
一五一	上	八	雕形本	雛形本
同	下	三	汲んで	汲んだ
同	同	五	東都市	京都市
同	同	八	全體として細部	全體としても細部
同	同	一二	稿了）	稿了）

（大正十年二月二十日稿了）

昨年の史學地理學界

史學界

史學一般　西南獨逸學派の建設したる新理想主義の歴史哲學或は文化哲學の考說は一般思想界社會諸科學の上に重大なる意義影響を及ぼせるこ共に史學の認識論的問題を殆ど全く決定せしめたるかの觀あるものなりこす本邦に於ても兩三年來これに關する紹介又は論議を試むる言說の公表せらるゝもの頻々として相踵ぎ、著しく一般學徒の視聽を惹き來れる狀勢なれば史學の理論を取扱へる諸論文や、これに觸れたる一般的述作中、注目すべき論說は主として該思想の感化を受けたるものに係れり此際新カント派の雄にして歴史哲學の認識論を大成せりこ稱せらるゝリッケルトの名著が昨年「文化科學こ自然科學」（近藤哲雄譯）こ題して忠實なる邦譯を觀たるは讀書界の爲に特に慶賀の意を表すべきここゝいふべく一昨年公にされし和辻氏のラムプレヒト近世史學譯述こ並稱

すべき勞作なり。更に進んで西南獨逸派歷史哲學の基礎形態を一層系統的組織的に知得せんと欲する人士に對して近來の好著と目せらるゝメーリス氏の歷史哲學綱要が「新理想主義の歷史哲學前篇(米田庄太郎)二冊に紹介されしは亦吾人の喜悅を增さしむる學界の慶事にして著者の明快簡潔にして些の澁滯する所なき抄譯は次いで公にさるべき同書後篇に於ける著者自身の歷史哲學の起源性質に對する論究と相俟ちて一般思想界、社會科學、史學の根本問題に係はるものを啓發する所尠少ならざるべし此書はメーリスの原著中第二部「歷史哲學の歷史」を省き第一部「歷史哲學の問題或は歷史及び普遍史の理論」「第三部歷史哲學の體系或は普遍史の內容上の構造」に準據し歷史哲學の根本問題及び歷史論理學卽ち方法論、歷史價値論、普遍史の特殊諸問題を說き最後に歷史哲學の組織體系を普遍史的過程の內容上の構造によりて組成せしむる所以に論及せるものなり。「輓近の歷史哲學と社會哲學」(米田庄太郎、史林)は先づ社會學と歷史哲學との關係より說き起こして新理想主義的歷史哲學の淵源がカント哲學に於ける眞理概念、先驗の概念並びに文化價値の概念に發せるを述べ、それより歷史哲學發達の徑路、歷史哲學の諸問題を列擧し轉じてマールブルヒ派社會哲學の概念を檢察し其西南獨逸學派の標榜する歷史哲學の概念と根本的に一致せる所以を指摘せるものなり。「因はれたる經濟學」(大西猪之介)は正統學派經濟學の自然科學的法則論、歷史學派の經濟生活發達の階段的時代區分に於ける普遍化的方法に對し新しき文化科學派の經濟學を說き、リッケルト等の認識論的批判を斯學に試みんとせるものにして第六章文化科學へ、第十章文化科學派等の諸項に論ぜる所、輕妙暢達の筆傾聽すべきものあり。吾人は尙遡りて新理想派哲學の源泉たるカントの批判哲學を究め其表示せる概念が歷史哲學的考察に發動力を與へたる所以を觀んとする近時の思想傾向を代表せるものとして「批判哲學と歷史哲學」(三木淸、哲學研究)の一篇を推奬せざるべからず。「フィヒテの歷史哲學」(久保正夫、同誌)はカント以後に於ける唯心論的傾向を代表せる哲學者の人類歷史の歸趨及び意義に對する目的論的思

索を究明せるものなり。史學の性質を其歷史的變遷より觀て社會學に對する關係を說けるものとして「史學と社會學との關係」（財部靜治、經濟論叢）は歷史的思想の性質より歷史哲學の問題に及べる「歷史哲學の意義」（林博太郎、東亞之光）と共に傾聽すべき穩健且平明なる講說なりとす。飜つて更に異りたる思想の方向に眼を轉ずれば最近の社會主義的思想昌盛なるに促されて其本宗たるマルクスの經濟的唯物史觀を考究論議するもの昨年より引續いて愈多きを加へたる觀あり。「經濟的文化と哲學」（野村兼太郎）は其の第三篇「歷史の經濟的要素」の部に經濟的史觀の意義を說き、セリグマン・マシュース等の反對論を批評したる後唯物史觀の限界論に入り人種的感情、生物的感情との交涉を論じ更に社會主義、歷史的法則、及び精神的方面との關係に就いて意見を述べ居れり。尙同氏の發表せる論文として別に「經濟的史觀論の價値」（三田學會雜誌）あり。「科學的社會主義と唯物史觀（河上肇、社會問題研究）はエングルスの著書の一部を譯出して社會主義の科學的基礎を說き唯物史觀と社會主義との理論的關係を明かにせるもの、「社會主義と唯物史觀と倫理學」（同人、同誌）はアルツル・ハイヘンの論文抄譯により「因果律と精神生活」（同人、同誌）はグンテルの所說に據り、孰れも必然的因果律に基く唯物史觀と精神生活との關係を說けるものなり。「マルクスに現はれたる進化論的思想及其批判」（島本愛之助、丁酉倫理講演集）はマルクスの進化論的思想の哲學的根據卽ちヘーゲルの辨證法的哲學思想の形式と其科學的進化說とを吟味して唯物史觀の缺陷を指摘せるものなり。最後に史學史の方面に於て興味ある叙說は「ローマンチック時代に於ける一青年史家の生立」（坂口昂、史林）の一篇なり。こはレオポルド・フォン・ランケの少年時代より壯年期に亘る思想生活の發展し行く徑路を啓蒙古典主義よりローマンチックの風潮に移渡せる時代の環境裡に觀察を試みしものにして境遇時勢の感化が如何に史家の生涯、其人物事業に至大の影響を及ぼすものなりや卽ち時局の發展と史家の生立との關係に對して讀者の感興を促さしめたるものなり。

〔植村〕

國史　昨年度の業績中一般史に關するものに「日本史講話」（萩野由之）あり太古より最近に至るまでの我國の變遷推移の全般に亘りて國史の一般的智識を養はんが爲めに編纂せられしものなり。

政治制度史の方面にありては「長慶天皇御卽位の研究」（八代國治）は著者の前年發表せる長慶天皇の御卽位說を纒めたるものにして加ふるに附錄として江戸時代以降諸家の本問題に關する論說を網羅して讀者の參考に供し且つ著者の立證に用ひたる史料を添へたり。「賤ヶ岳戰役に於ける羽柴柴田兩氏の外交」（渡邊世祐、歷史地理）は兩氏が此戰役前に各勢力を擴張し與黨を作ることに腐心し互に術策を弄して外交政策を用ひし事を叙し「源頼朝の勃興と伊豆の走湯權現」（宮地直一、同誌）は頼朝の伊豆に崛起するに當りて走湯權現の衆徒と提携するに至りし經過を說き「文久三年正親町公董卿の筑前藩下向に就きて」（藤井甚太郎、同誌）は文久三年五月十日長州藩の攘夷實行と關聯して勅使公董卿の筑前藩に下向せられし始末を明にし「文久三年夏北九州諸藩の合從運動に就きて」（同人、同誌）は前論文と關聯して京都に於て長州藩を中心とする攘夷論者と守護職松平容保を中心とする公武合體論者とが互に祕策を廻らして其主張の貫徹に努めし際、北九州の諸藩は憂慮の餘、此時勢を傍觀するに忍びずとなし、期せずして上京運動を試みたりし所謂九州合從の眞相を明にしたるものなり。而して「新井白石の政治思想と王號復行問題」（栗田元次、歷史と地理）は白石の政治主義を以て禮文主義と目し其對內施設は勿論王號復行も此主義の發現に外ならずと云ひ彼の皇室尊崇と幕威主張とは矛盾するものに非らざる所以を力說す。「明治時代に就きて」（古川良一、史林）は明治時代を區分して各時期に就きての概括的考察を加へたるもの。「莊園制度崩壞の一例としての越前國河口坪江莊の研究」（牧野信之助、同誌）は河口坪江及其隣接二三莊の發達を略述したる後主として莊園の崩壞期より新なる領土の統一期に移る經過を說明し「我國海軍の發達」（黑板勝美、中央史壇）は我海軍の發達を第一期建國以來齊明天皇の御代百濟白村江の戰迄第二期齊明天皇以後蒙古襲來迄、第三期蒙古襲來以後江

戸時代迄の三期に區分して其發達の狀況を概說せしものなり。「鎌倉時代の家族制度」（三浦周行、經濟論叢）は前後七回に亙れる長論文にして章を式目以前、式目、式目後、家族制の實施の四に分ちて戸主、家督、惣領の概念、相互の關係、戸主の權限、戸主と家族の關係、夫婦間の關係及婦人の地位權利、養子、家督及遺産相續等家族制に關る法制的百般の事項に就き論述せるものなり其說く所頗る多岐に亙ると雖も此時代の家族制度が必ずしも今日の意味の戸主制度にあらざること女子の財産權を尊重せると總領庶子の公事分擔額に關する慣習武家法に及ぼせる公家法の影響等につきて詳說せるを見る。次に經濟史に關する論文にては「中世日本の寺院領」（朝河貫一、歷史地理）高野山領神野眞國猿川莊の成立、性質、變遷を中心として一般莊園の發達變遷を論ぜる出色の文字なり。「我國資本家階級の發達と資本主義的精神」（園谷弘）は全編二部より成り序論に於ては江戸時代に町人の富の蓄積は彼等の階級意識を誘起し遂に町人が社會を支配し武士も百姓も次第に町人化せし事を說き本論にては資本家階級發達の事情を各方面より觀察し次て此階級が經濟界は勿論社會政治上に支配權を獲得するに至りし次第を論ぜしもの、社會學上の立場より我近世史を考察せし點に於て其價値を認むべしと雖も文章の生硬にして難解の字句少からざるは惜むべし。「日本經濟史」（瀧本誠一）は德川氏封建制度の經濟的說明といふ一名を當れりとすべく德川時代のまとまりたる經濟史として最初のものなり封建制度、法制の不統一、土地制度、德川氏及諸大名の財政、貨幣問題、通商政策、德川氏の道路交通政策、都市の發達、四民の經濟狀態、封建時代の經濟思想の十章に分ちて論述し附錄として經濟年表を添ふ。「朝鮮役の給養問題」（杉村勇次郎、史林）は軍事的立場より征韓役の給養問題を論じたるものにして我軍が給養上の考慮周到ならざりしと水軍の編成に重きを措かざりしと地方鮮民との感情疎隔したるとの爲め糧秣の缺乏を來し、延いて作戰に影響を及ぼし遂に此の役をして失敗に終らしめたりと論ず。「津輕藩の原野開墾の大勢」（橋村博、歷史地理）は藩祖津輕爲信以來歷代の藩主が荒野の開拓

を奬勵したる爲めに、初め財政窮乏に苦みたるも、後には莫大なる新田を得て石高增加し、以て幕末維新の活動の本源となりし事を述べ「岡山藩の社倉法」(岩崎孫八、同誌)は池田光政の時より明治維新まで永續したる社倉法の起源、創設の動機及其の方法等に就て說明したるものにして共に地方史研究家の參考たるに止らず廣く爲政家に裨益尠からざるべし。「經濟史研究」(本庄榮治郎)は著者の從來發表したる論文を集めて出版したるものに係り主として江戸時代の經濟に關する論文集にして經濟發達階段說、德川時代の經濟學者本多利明の研究、德川時代の人口及び人口政策、德川時代の米問題、德川時代の酒造政策、德川時代の塩問屋、飛脚の變遷、參覲交代制度の沿革、家族制度の研究、西陣研究の十篇を收めたり。對外史に關する論文としては吾人は先づ「日明勘合の組織と使行」(栢原昌三、史學雜誌)を擧ぐべし本論文は日明貿易の證憑たる勘合の制度、組織に就て詳細なる研究を遂げ其使行の方法に及べるものなり。「薩摩琉球國勳章に就いて」(栢原昌三、尾佐竹猛、赤堀又次郎、歷史地理)は慶應三年巴里に開會せし萬國博覽會に際し薩藩より佛國皇帝及同國文武官に贈呈したる勳章の由來を說明したるものにして此博覽會を機として幕府と薩藩とが外交上の懸引を試みたる興味ある問題の眞相を知るに足る。此問題に就いては始め栢原氏の說明あり後、尾佐竹氏之を補足し赤堀氏は栢原氏の所說を批評補正せり。「龜山上皇殉國の御祈願」(平泉澄、史學雜誌)は弘安四年蒙古襲來の際に畏くも身を以て國難に代らん事を伊勢大神宮に祈らせ給ひしは龜山上皇に非らずして後宇多天皇なりとの新說を提出したる八代國治氏の說を駁して龜山上皇說を支持したるもの「函館駐劄露國領事ゴスケウ井ッチ」(阿部正己、歷史地理)はゴスケウ井ッチ函館在職中、他國領事が皆商業貿易を本務とするに反し宏壯なる領事館を建築し病院、敎會堂を建て、邦人を漸次露化し干戈を動かさずして其目的を達せんと努めたる露西亞式政策を叙し「千島樺太の回顧」(上野菊爾、同誌)は江戸幕府末期に於ける露西亞の、太平洋方面に於ける活動を叙述し併せてチクメニエフ等露國側の記錄によりて新事實を紹介せり。更に社會史の方面に於ては「國史上の社會問題」(三浦周行)は我國上古以來の社會組織、制度狀態及それより生じ

たる社會問題それに對する政策等の主なる者を擧げて其梗概を說明し且つ利害得失を批判せし者「社會の弛廢と武門興起の機運」(勝水淳行、中央史壇)は平安朝に於て泰平久しきに及び人心漸く倦怠し上流社會の文弱奢侈地方の疲弊衰微を生じ而も我國民的尙武の氣象此頃より社會意識上に現出して地主の發達、武門の興起となり彼等武力に依りて一家並に社會の秩序を維持するに至りし事を論述し「平安時代末期に於ける職業的新階級」(松本彦次郎)(京阪文化史論)は神人、座人、供御人等の商工業者が權勢家を其保護者と仰ぎて職業の獨占を企てし事を說明せり。史傳に關する論文は其數枚擧に遑なしと雖も今其主なる者を紹介すれば「元大都大覺寺住持日本國沙門東洲至道」(新村出、藝文)は聖一國師年譜に見ゆる東洲至道は知恩院所藏「禮念彌陀道場懺法」に據りて日本僧なる事を明にし此版本の由來を述べ至道の住したる北京の大覺寺に言及し「村上義弘勤王事歷に就て」(藤岡繼平、歷史地理)は備前因島の村上氏の祖義弘が元弘、建武の際より約四十年間終始其優越なる海軍を以て宮方の爲めに偉勳を立てし顚末を叙し「芸亭院と賀陽豐年」(新村出、藝文)は本邦に於ける公開圖書館の權輿、奈良芸亭院の創始者石上宅嗣と芸亭院に育成せられたる碩學賀陽豐年の關係を叙し「沙石集の著者無住國師」(花見朔巳、中央史壇)は無住の著書其他無住國師道跡考等によりて無住の事蹟を闡明するに努め「或る戰國武士の自叙傳」(三浦周行、史林)は毛利氏の家臣玉木吉保の手記「身自鏡」研究にして先づ玉木氏の世系を述べ本記の史的價値を批判し次で本記が史料として如何に役立つかを各方面より考察し「莊內謫居中の加藤忠廣」(畑田久勝、國學院雜誌)は忠廣改易の內情を繹ね鶴岡昔雜談、古日記等の史料に據りて莊內幽居中の忠廣の狀況と酒井氏の待遇とを述べ、遺產並遺臣の處分に及び最後に忠廣の人物を觀察して普通世に傳ふるが如き暗君にあらざるを辯じ「西類子」(川島元次郎、歷史地理)「船本彌七郎」(同人、同誌)は共に江戶初期海外貿易家の事蹟にして前者は呂宋貿易の傍ら幕府の命を受けて國情偵察の任務に服し後者は廣南貿易に從事し彼我當路者の間に立ちて常に外交的使命を帶び安南交趾地方に渡航する本邦商人の監理たりし事蹟を明にせり。更に視界を改めて學藝の方面を見んか「西宮記考」(和田英松、史學

雜誌）は西宮記の著者及び著作年代より始めて書名、卷數、內容、諸本流布等に亙りて研究を進め特に諸本の異同比較に力を盡し「法橋顯昭の著書と守覺法親王」（橋本進吉、同誌）は平安朝より鎌倉初期にかけて歌壇の名匠として有名なる顯昭の歌書に就て從來の諸研究の不備缺陷を補訂し且つ是等の歌書の多くは仁和寺喜多院の守覺法親王の命に依りて進註せしものなることを推定せり。又「醍醐花見の和歌の作者に就いて」（高柳光壽、同誌）は慶長三年三月十五日に催されたる豐臣秀吉の醍醐花見の時に詠じたる和歌短冊百三十餘枚の作者を考定したるものなり。「義洋篇と堀田六林」（花見朔已、藝文）は俳人横井也有と其門人堀田六林との漢和聯句集なる義洋篇の完本、而かも也有の自筆本を發見せしことを紹介し併せて六林の事蹟とその著「まにふんで」に就て記し「平安朝の漢文學」（內藤虎次郎、歷史と地理）は平安朝の漢文學と支那文化との關係を見且つ當時の漢文學が如何なる特色を帶ぶるか又當時の學者の造詣の程度並に詩文等に就て考察を加へ當時代の著書中殊に注意すべきものを擧げて解說し最後に漢文學の國文學に與へたる影響を述べ「平安朝の手習に就て」（吉澤義則、同誌）は平安朝に於ける習字の教育上に占めたる地位を說き其字體は今やう卽ち現代的なるを究極の目的と考へられたること、手本には目的の相違より二樣ありしことを注意し手本の種類と其用ひられたる時代の前後を論じ「親鸞聖人筆跡之研究」（辻善之助）は著者が本派本願寺並に專修寺に於て獲たる三十餘點の親鸞の眞跡に就いて比較研究を試み其筆法を明にしたるものにして、從來眞僞不明なりし親鸞幾多の著書の自作なることを證明したもの尠からず。「萬葉集の書名に就て」（岡田正之、心の花）は舊來の諸說を擧げて別に一家の說を立て此歌集の選者と認めらるゝ大伴家持は山上憶良の歌風を慕ひたるのみならず萬葉集の選次も憶良の類聚歌林に負ふ所多かりしが故に萬葉を選み其名を命ずるに當り憶良の歌林に思ひ合せて歌林の萬葉を集めたるこの意味より萬葉集と名け憶良の歌林に配したるものなるべしと云ひ「萬葉集代匠記に就いて」（久松潛一、同誌）は主として書史の方面より此書を考察し其成立の由來及年代を考證し諸本の異同を考へ且つ初稿本代匠記と精撰本代匠記との比較を試み代匠記を光圀に上りし年代

に就て舊說の誤解を指摘せり。歷史地理に關する論文には「志波城と磐基驛に就て」（小笠原迷宮、歷史地理）は蝦夷征討の爲めに延曆二十二年に築かれたる陸奥國志波城と翌二十三年に設置せられし磐基驛との位置を考證し「江戸地勢考」（阿部愿、同誌）は江戸氏時代以後の江戸の地形及形勢を探ねんとするものにして先づ「江戸氏時代の江戸」なる綱目の下に江戸莊、江戸鄕等に就ての考證を發表せり〔桑原〕

次に文化史の方面に於て「日本古代文化」（和辻哲郎）は一部の著書として發表されたりしも便宜上其內容の示せる各項目の下に別揭せん。

「神代史研究」（松本芳夫）は古事記が對內的、日本紀が對外的の動機を有するは兩書の價値を考ふる一視點たるべしとなし、日本神話の多くの矛盾、混亂、曖昧を有するを神代史が遙後世の編纂に成り材料相互の統一整理の拙劣なりしに歸し「上代史概觀」（和辻哲郎、日本古代文化）は日本民族の主要成分は石器時代より日本に存在せりとし、國家統一の機運は三世紀以後たるべくフンの刺戟による世界的民族移住の影響として四世紀前後の歸化人來

住ありたりとし、其極東民族の動搖が日本國家成立の重大原因なるべしといひ「歸化人と上代文化との關係」（同人、同書）は又「古代日本に於ける歸化人の知力的影響について」（同人、新時代）と共に併せ看るべきものにして上代に於ける日本語は發音の上に於て我々とは可なり緣遠かりし丈韓語と近かりしなるべく漢字を以て日本語を表はすに最も効ありしは韓土にありて韓人と密接の關係ありし日本人特に其混血兒なるべく歸化人も亦漢字の理解と漢字の日本語化に努力したるものにして古事記製作の重なる理由は讀み難き古文書の文字を讀み易き普通の文に書き改むるにありといへり。其「古事記の藝術的價値」（同人、日本古代文化）は上代人の思惟力の未發達は想像力の矛盾せる活動を許し其想像力の部分的に深入りせる爲め全體を忘れて破綻を生ぜりといひ、其描寫を目して豐富なる直觀を貧弱なる思惟によりて經めし印象を與ふとし、古事記の最も美しき部分なる戀物語の氣品高きは描寫の無邪氣さによるものにして其深刻の度薄き事と共にこれが價値を定むべき視點たるべしといひ。「歌謠」（同人、同書）は記紀に現はれたる歌謠を物語より引

離し獨立のものとして觀察し茲に初めて全幅の美しさを示すこて多くの例を擧げ此素朴なる叙情詩は必ずしも同程度の文明の民族によりて作り出さるゝものに非ずそこに民族の氣稟ありとし日本歌謠の形式は決して漢詩の型に依りしに非ず音數の多少、長短句の配列・律動によりしものなりこいへり、而して「言語に映じたる原人の思想」(金澤庄三郎)はアイヌ語の研究によりて其宇宙觀、生死觀、人生觀、異人種觀、方位、家族、衣食、數詞に對する思想を知り他の原始民族のそれと比較して我古代民族の心理狀態を窺知せんこせしものなり。筆を轉じて、宗教信仰に關するものを錄せんに先づ神道神社等につきては「神道起源論」(津田敬武)は、其所論の資料を神話傳說等に取りたる外に上代考古學上の事實に據り且つ類例を廣く世界各地に求めて考察を下せるは本書の特色の一こすべく第一編に於て日本石器時代の諸民族間に共通する宗教思想の存在を認め原始神道の萠芽も此所に胚胎すべしこいひ第二編に於て神道の成立こ原始時代の宗教思想こを種々の方面より考察して神道の由來を明かにせんこし「出雲派の神名に關する一研究」(笠井新也、歷史地理)は記、紀、風土記以下に記載さる、神々の中「主」の尊稱を含むもの、大部分が出雲派の神なる事は、其名稱上の一特質なりこいひ「吉田兼倶の寃罪」(平泉澄、史學雜誌)は兼倶の僞作こせらる、三社託宣は、東寺百合文書寶德三年十月七日山城國上久世莊花藏庵雜具目錄の中に既に今日の如き形式を具備したるべき記錄あるを見れば、兼倶の年齡より推して到底彼の僞作こすべからずこて其寃を雪ぎ、「宗源宣旨こ社家の官位」(喜田貞吉、民族こ歷史)は宗源宣旨は神に位階を授けしものにして社家の官位こ何等關係なく神道裁許狀こ共に天文頃より始まれりこし、「福神沿革概說」(同人、同誌)は我が福神は宇賀神、道祖神の二大系統に分れ前者は農業五穀、衣食の神こなり、後者は傀儡子の祭る所こなりしが此外に印度の福神、支那の福神に我が地主神たる大黑、夷の二福神加へられて別に七福神を生じ布袋、福祿壽は寧ろ講家の遊戲によりて福神に加はりしものなりこいひて世相の變遷こ福神の沿革を述べ「七福神の成立」(同人、同誌)は室町時代に於て竹林七賢に傚ひて當時崇拜せし七體の福神を取り合せ、鈿女命を加へしも後に同じ女體の辨財天

と取り替へしものなりとし更に「夷三郎考」(同人、同誌)に於て、大國主なる夷と、事代主たる三郎殿とを合體して一柱の如く考へ海の神として漁者、航海業者に信仰せられ港の神、商業の神となり終に福神に加へられし事を說き其神像を研究して魚を持ちしは三郎殿にして魚を持たぬはもとの夷像なるが共に古きものなしといへる「夷三郎神像考」(同人、同誌)あり「大黑神考」(同人、同誌)は、大國主命と大黑天神との習合を認めて眞言宗に起源すべしといひ「大黑神像の變遷」(同人、同誌)は一は天台宗に傳はりし南海寄歸傳式のものと、一は眞言宗にて大國主命と習合して考案したるらしき大黑天神法式のものとありて後者は世間に流布したりといひ「福神としての泰山府君」(西田直二郎、同誌)は、支那に於て生命を司り窮達榮枯を司る泰山府君は、我國に於ては延命の神たると同時に福祿を授くる神となり老人星、壽星、壽老人福祿壽と混同されしなりといへり。「近畿地方に於ける神社」(內藤虎次郎、京阪文化史論)に於ては平野神社の祭神を朝鮮王を祭れるものとし、兵主神社を山東省の信仰を移民の將來したるものなりといひ「護王神社」(本多辰次郎、歷史地理)は嘉永の頃和氣公追賞の議起り幕府も協賛して嘉永四年、高雄山神護寺の淸麿祠に宣命使を立てられ、護王大明神の神號、正一位の神位を給はりし事を記し、此事に關して當時明覺明榮の二貧僧が、私利を計らんが爲めに企てたるなりとの世評ありし事を野宮定祥卿記によりていへり。又「淺間明神とその分布」(宮地直一、同志)は富士の山靈を祀き祭れる場所は山を中心とする周圍地方の人文發達の傾向と自然地理の狀態とに左右せらるゝものなりとの理論は實際に於て東海の表に密にして山陰の方面に疎となり駿河の中にては裾野地方甲斐の中にては南都留を以て第一とすとし人文の進展、街道の方向、都市の發達等の各方面より觀察して其分布を知るべしといひ「富士講の沿革」(山本信哉、同誌)は天文十年に長崎に生れたる長谷川左近角行眞人東覺が常陸國旭臺にありて旭を拜し天下泰平を默禱して四方の名山大川を巡歷し富士山に登りて苦行を修し富士講の開祖となり、其弟子日坦、坦心、月行等より村山光淸、伊藤食行の二派を生じ四民平等の原理を說き享保頃に江戸に行はれ幕末維新に際して組織を改めたりといへり。佛教寺

院につきて「文化史上より見たる京阪地方の史蹟」（三浦周行、京阪文化史論）は主として神社寺院につきて其所在、信仰の變遷、信者の移動より、社會と社寺との接觸點を力說し、「平安朝に於ける京都の寺院と其人文的事業」（西田直二郎、同書）は賤民の從良、奴婢の開放、救濟慈善の方面に盡したる貢獻を擧げたり。「善光寺草創考」（喜田貞吉、歷史地理）は平安朝頃より善光寺草創者を秦巨勢大夫と苦麻績東人とに歸する二說ありしも其草創を推古十年とするは一致することゝ本尊は欽明十三年聖明王奉獻のものとすれども更に三十七年前なる善記四年との說は捨て難きことを說き「弘法大師の入定說に就いて」（同人、史林）は弘法大師は明かに病死せられたるに拘らず其死後二百年程を經たる頃既に入定不死の說の存することより入定とは禪定三昧に入り一定の期間飲食を絕ち靜思默考する事にして自殺の事に非るも大師の高德が其不死の說を完成せしめたるものなりとし「弘法大師入定說完成の時代」（同人、歷史地理）は之を補ひて治安三年藤原道長高野詣の時に既に存在したりといへり、「平安朝時代淨土敎信仰の一班」（富森大梁、歷史と地理）は、主として繪畫を通じて淨土敎信仰が一般民衆に可なり廣く行はれ而かも其信仰は甚だ熱烈なるものありしは信徒の境遇にもよりしならんといひ「關白兼實公の眼に映じたる法然上人」（高瀨承嚴、歷史地理）は玉葉に顯はれたる上に於ては上人が公に召されて往生淨土の思想を說きしは唯一度にして他は皆授戒の師に召されたるものなるを指摘し兼實が上人の說を眞に理解したるものなりやを疑へり。「長尾氏と一向衆」（長沼賢海、同誌）は長尾氏治下の一向衆が初め一揆性に薄きものなりしは、長尾氏の統治の他に比して勝れるものありしにもよるべきが、其後永正年間以來一揆性を帶ぶるに至りしも爲景の外交策略は一時之と和しやがて極端に之を禁じたるをいひ「安藝門徒の一揆運動」（同人、歷史と地理）は安藝門徒の一揆と石山合戰及び毛利氏との關係を述ぶ共に地方に於ける宗敎一揆として併せ見るべし。思想史に於ては「水戸學派の攘夷論」（井野邊茂雄、史林）は水戸學派に於ける攘夷論者は國民をして護國の精神を盛んならしめんとし、又は開國遠略國家膨脹を策せるものにして攘夷は其手段に過ずといひ「平野國臣の思想の研究」（藤井甚太郎、東亞

之光）は其根本に横はれる思想は、倒幕によりて政權を朝廷に復し日本民族の團結を圖るにありて國粹保存論者なれども漫然歴史に拘泥するものに非ず黑田侯に上書して從來藩が全力を傾注せる長崎警備が、何等の價値なきに至りしを痛論し、畿内の地に長崎入費丈けを用ふれば一廉の勤王にもなり各藩の合體連衡に役立つ事をいへるを指摘し「元祿六年膳澤郡古切支丹類族書上につきて」（齋藤斐章、史林）は此地方が伊達政宗の信任を得其基督教徒を處刑せし時にも特に赦されたる後藤壽庵の所領にして、現に信者の墓碑、遺物の發掘品等多き所なりとて、信徒の子孫、姻戚が永久に危險視せられ、彼等一族を始め、親戚、五人組、肝煎等にまで累を及ぼし、事を述べ「德川幕府の耶教禁壓と儒者」（新村出、同誌）は林道春は大に耶蘇教を排斥したりしが蕃山は佛教によりて民心を迷はしめたる結果耶蘇教を誘致せりと爲し白石はシドッチ査問の後其人物、學識を稱揚し徂徠は天主教は國禁なるも書物をも絶對に披見せしめざるは有司の過なりと論じて時に或は建議を敢てせる事は思想問題史上特筆すべしといひ「平田篤胤の神學に於ける耶蘇教の影響」（村岡典嗣、藝文）は篤胤の神學的思想として宣長よりも進歩せるは主宰神及び來世觀なるが、斯る思想は實に耶蘇教の影響と看做すべく文化三年著の未定稿本教外編によれば其思想のみならず用語の上に於ても至善、審判、自造の惡、眞幅等を使用せる事によりて、舊約全書創世紀の說を幾分知り居りしは明かなりといへり。而して「京都に於ける西洋文明」（新村出、京阪文化史論）は衣食住及び學術の方面に與へたる影響を認むれども非國家的思想は九州地方以外になしと論述せり。藝術史方面に於て「日本繪畫論」（瀧精一、國學院雜誌）は日本に於ける古代の繪畫は佛畫を以て最も著しきものとすとて佛畫の發達より筆を起し次に發生せる倭繪は後世のものに比して謹直にして色彩絢爛たる特色を有し漢繪は鎌倉中期以後に萠芽を有し墨の淡濃、鈍染具合に力を盡し主觀的なりしをいひ最後に日本畫に於ける技工の特色として極めて省略せる用筆を以て餘韻を止むる事主觀的にして作者の情緒を表現せる事等を擧げ「日本と希臘の彫刻」（濱田耕作、歴史と地理）は特に我奈良朝以前とフィデアス以前との彫刻に就て原始的狀態より前面主義に入り古拙的微笑を有す

る眼と口との技巧、並行したる皺線を重累する衣紋等一に全く同一軌の發達をなし天平時代の寫實的にして自由なる手法はフィデアスのそれと比較さるべく、彼我共に誠實が製作の凡ての部分に現はる、事は後世の追從し得ざる所なりと說く。「橘夫人厨子の畫に就て」(瀧精一、國華)は此畫中最も秀でたるものは扉に於ける菩薩圖にして須彌座のもの之に次ぎ共に印度畫の餘影を存し圖取法の自然にして毫も形式的强要なきは、アジャンタ石窟の壁畫に見ゆる所と合致し法隆寺の壁畫と共に白鳳天平初期の繪畫の作例として信用し得るものなりといへり。白鳳藝術と文學との間の脈絡を把握せんとせるものに「白鳳天平の彫刻と萬葉の短歌」(和辻哲郎、歷史と地理)あり推古佛の簡素、單純と記紀の上代の叙情詩と、朝寢髮われはけづらじの歌と白鳳時代の偉大にして熱烈緊張したる造形美術の特性と、山上憶良、山部赤人等の精練微妙なるものと、天平前半の彫刻の有する豐滿と完成と、是等は皆其一の例證なりとして、彫刻の表はす音樂と、歌謠の示す刀痕とによりて當時人心の心裡を內面的に考察せんとしたる一種の新らしき試みを示し「法隆寺壁畫保存方法調査報告」(內務省宗教局)は壁體及畫面の調査應急的保存上の設備を說き根本的保存法として畫面の硬化及び龜裂部の補塡等委員調査の結果を詳述し近重博士の硬化法の有効なる事を認めて其實施すべきものなるを斷じ壁體の性質に關する基本上の調査、顏料の性質に關する化學的研究の結果等の重要なる記事を含む。「野山の五大力菩薩の考」(田中豐藏、國華)は二種現存する內の一種は北室院所藏のものにして、守護國界主陀羅尼經を山下の慈尊院にて修せしが、寬治五年衆僧山下往來の勞を省く爲めに山上金堂にて勤修する事になりし時の本尊にして曼荼羅風に一幅に畫きし鎌倉時代大仁王會の本尊の模寫として製作されしものなるが他の巡寺八幡講共有のものは五菩薩を五幅に分ち(現存三幅)たるを豐臣秀吉が興山寺を創建したる天正十八年東寺より取寄せたるものにして年代は藤原も衰世に近き頃のものといへり。然るに昨年は醍醐寺の所藏繪畫古文書を陳列展觀せしめし事もありて藝術史家の注意は一齊に醍醐寺所藏品乃至桃山時代の藝術に集注せられしが如き觀あり「醍醐寺の寶物」(黑板勝美、美術寫眞畫報)は此種の論文の總論をな

せるものにして、「過去現在因果經に就て」(藤懸靜也、國華)は上品蓮臺寺、醍醐寺、東京美術學校所藏の各一卷及び久原文庫益田男爵所藏本を比較研究し因果經の繪は全體の構圖、服飾風俗より見て當代の日本人の創意する能はざるものなれば必ず大陸傳來の六朝式の原畫ありしなるべく寫經は唐朝盛時の文化を傳へたる天平寫字生が練熟せる筆に精神を籠めて書寫せしものなれば繪と經との間に一時代を懸絶したるが如き趣致精粗の差異を呈せしものならんといひ「醍醐寺所藏の仁王經曼荼羅に就て」(同人、同誌)は二種の曼荼羅の內一種は紙本墨畫の粉本にして四幅存し古來弘法大師の筆と稱して密教家の尊重する所なるがこの內三幅は恐らく大師筆を平安朝末に模寫したるものに就きて更に鎌倉末期に模したるものなるべく一種絹本極彩色のものは樣式の上より平安朝末、定海僧正時代の製作に係り少くとも定海流の曼荼羅なりと斷ぜり。「訶利帝母圖に就きて」(同人、同誌)は訶利帝母の意義、經軌より遡りて印度に於ける訶利帝母像は印度ハーリチ像の變化せるものなるを說き、醍醐寺所藏のものは淸瀧權現の形相に負ひ神格化されたる如く足利初期の製作ならんも、我佛像中特殊のものにして形相の上よりするも頗る興味深きが、手法は藝術的見地より見、印度の像と比較して殊に興趣深しといへり。「美術畫報」は醍醐寺號を發行したりしが、其中「醍醐寺の佛畫」(藤懸靜也)は是等の佛畫の多くが平安朝藝術の純日本的に發達したる樣式を其根本とし一系統の佛畫の現存する事を異として之を醍醐寺樣と名づけ、「因果經及び五重塔壁畫」(內藤堯寶)は因果經製作の年代を天平時代なるべしとなし壁畫は唐朝密教畫の影響を受け醍醐寺樣の淵源をなすといへり。次に醍醐寺所藏信海筆不動明王を中心として研究したるものに「信海阿闍梨の藝術」(橋川正、親鸞と祖國)あり、其姿勢及び端書より推考して、蒙古襲來てふ國民的緊張の時に當りて生れし藝術なりといひしに對して「信海筆不動明王圖につきて」(栗野秀穗、歷史と地理)は、信海の藤原信實の第四子なる事を言明し其兄弟なる袴殿專阿彌陀佛と共に白描寫に長じたるが其筆致、描線頗る相似て人物の容貌を描くに長じたりといひ似繪畫家の一族に新に信海を加へたりしは注目すべく「山樂畫集」(帝國美術社)「醍醐寺靈寶集」(關西考古學會)「國寶襖繪

選集』(日本美術學院)の發行は何れもコロタイプを應用してそれらの資料を提供せり。

「桃山美術の背景」(高柳光壽、歴史と地理)が此時代の繪畫も彫刻も建築の應用藝術として存在せしものにして威赫の美術、貴族の假面を被れる平民の美術なりといへるは「桃山の俤」(一類伸、同誌)は此時代の文化は超人間の文化より人間の文化に進む段階にあるものにして繪畫彫刻建築何れも主君禮讃の必要の爲め、其威嚴を語るものなれば此時代の繪畫の中心は畫幅の中に非ずして廣間の上段に安座する主君にありといへると對比すべく、「高臺寺蒔繪の特色」(六角紫水、美術寫眞畫報)は細微緻密なるべき蒔繪の技術を擴大して建築にまで及ぼし能く此時代の風潮を感ぜしめし點に存すとし、「桃山時代の障壁畫」(福井利吉郎、同誌)は此時代の作家として個性を其作品の上に鮮かに印したる海北友梅の障壁畫に就て、欵印、構圖、個々の形態、線及び色より其特色を論じ(未完)、「桃山時代の建築」(伊東忠太、同誌)は人間の爲めの城堡官室、住宅を經營せんとする所に中心を求むべしとし其手法は、和樣、から樣、天竺樣の何れにも拘泥する所なく往々全然新奇なる手法を試みたるものあつて、何事も彫刻と彩色とを適用せりとて裝飾、建築彫刻、建築文樣共に其變化に富める事、磊落にして氣魄ある事を說けり更に近世期の藝術につきては「日本繪畫史に於ける洋畫派の運動」(古川修、美術寫眞畫報)の平賀源内、司馬江漢、亞歐堂田善以下を說き、四條派の圓山應擧、浮世繪の奥村政信も亦洋畫の影響を受けたるを指摘したるは「蕪村の藝術と支那文學」(稻束猛、國華)の寶曆明和頃の彼の作品が、當時流行の軍談物により支那俗文學に親しみしと見えて其影響を受けたるも比較的後年に至りては支那の詩文よりの感化著しく其藝術に現はれ假令題材を卑近なる環境に求めたりと雖も淨化され薰陶されたる超越的氣分に富み毫も俗氣を止めずといへると共に、我國繪畫の上に現はれたる外國藝術の感化を究めたるものにして「大津繪考」(藤懸靜也、同誌)は大津繪の筆者といはる、又平と、岩佐又兵衛とは全然別個の人物なるを辨じ先づ寛永年度頃より阿彌陀、十三佛の如き佛畫として現はれ其後藤娘奴の如き題材に筆を染むるに至り世の嗜好に投じ貞享元祿頃には畫題の範圍も廣まりて俗眼に入り

易き道化めきたる繪のみ行はれ傾城反魂香によりて更に世に紹介せられ享保以後は婦女童幼にも知られたるならんといへり。稍方面を新にして觀察すれば「日蓮上人說法圖」（田中豐藏）が妙法華寺所藏の同圖を以てして鎌倉中期の代表的祖師像の一とし、製作年代を佐渡以後身延の初期、敎信の涸染後直ちに描きしものなりとせるは「足利尊氏の講像について」（黑板勝美、史學雜誌）が京都守屋孝藏氏珍襲のそれを說明し、彼が勝利を得たる得意よりも苦戰後の疲憊を描けるものにして或は子孫鑑戒の寓意ある壽像に非るかといへると共に、講像に描かれたる主人公の內的生活を探求せんとしたるものなり。建築彫刻に關しては「富貴寺大堂」（同人、歷史と地理）は豐後國西國東郡の富貴寺大堂を說明して養老年間仁聞の創立なりといへる記錄を排し平安朝後期の建立なりといひ「豐後の磨崖石像」（大村西崖、美術寫眞畵報）また豐後國海部郡大日山以下の磨崖像を紹介し、傳說の如く仁聞の作か、大日如來を中心とした る密敎關係のものに非るかを研究考察する必要ありとし前者と共に此地方に於ける過去の佛敎文明を物語り「法隆寺聖靈院」（天沼俊一、歷史と地理）は文獻上及び實際上よりこれを研究して建久頃より嘉禎に至る間に修建されたりと斷じて構造樣式を細說し併せて金文、墨書を紹介し、「日本古建築の精華」上中冊（岩井武俊）は我特別保護建造物全部の寫眞を收めて之に解說を加へたり。本書の序文我推古飛鳥の建築が其標本となりしものに比して遙に藝術的價値を損耗したりとの內藤博士の序文は注意すべし「而して京都にて管見したる日本彫刻史の一面」（植田壽藏、京阪文化史論）は附近の彫刻に就て內面的に之を說明せり。

民族史について「石器時代のアイヌ民族に就いて」（喜田貞吉、民族と歷史）は此時代に於けるアイヌ民族が占領したる地域の廣大なりし事より河內國府及び備中津雲の石器時代の遺跡のアイヌ系統のものなるを說き「特殊民構成の三大要素」（同人、同誌）は古代社會組織の研究に對する序論として浮浪民、土師部、俗法師を三大要素なるを說き「俗法師考序論」（同人、同誌）は浮浪の法師もいつしか土着定住して在家の法師と混じ種々の特殊民となりたりといひ、引き續きて「聲聞師考」（同人、同誌）に就てそがもと下賤の僧の義に用ひられたるものを在來の俗

法師、社會の落伍者等の總稱として使用され陰陽●卜筮●遊藝等の職業に從事し、社寺莊官に附屬したるものは雜役に任し、警察監獄事務を視るに至れりと論じ、「大和に於ける唱門師の研究」(同人、同誌)は前考の各論とも見るべく興福寺所屬の唱門師は十座と呼ばれ寺院に對して人夫役を出す義務ありしとて五箇所唱門、川上唱門師、芝辻の唱門師等を擧げて說明し、其中には發展して戰國時代に武士として各地に轉戰し社會上の然るべき地位を獲たるものあるを指摘せり。風俗史方面を見るに「奈良時代の服飾に對する二三の考」(高橋健目、考古學雜誌)は推古朝の冠及服色、緌、褶、褌、一富一部に就いて、文獻と遺物とに基き從來の說に批判を加へて新見解を示せり。王朝末の風俗研究の資料としての「扇面古寫經下繪」の公刊また舉ぐ可し。其他「褌に就ての考」(中山太郎、考古學雜誌)は文獻、言語土俗上より古き前垂り。式の褌の後に袖無し式のチハヤに遷り變れる所以を說き「文身研究の興味」(寺田精一、中央公論)は種々の點より此習俗を考察せり。「南北朝以降に於ける舞踊界の狀態について(櫻井秀、歷史地理)は曲舞の初見の祇園執行日記觀應元、三、十八の條にして鎌倉末期以來漸次勢力を得て白拍子舞の淵源たりしが如く延年舞は本來各種の藝能を含めるものにして一種の舞を意味せずといへるに對して「曲舞」(岩橋小彌太、藝文)は偶然にも其初見を同一史料にありとし、白拍子舞の一分派なるべしといへるもや、接近したる見解とす。「風俗史上より見たる後水尾上皇と東福門院」(櫻井秀、史林)は、東福門院の入內の行粧の華奢を極めたるに對する京人の反感後水尾院の門院に對し給へる冷淡の御態度其內面生活の寂寞を外面生活にて忘れ給はんとして古典遊興等に耽り給へることより各種の藝術界を風化し、民間風俗を內廷に普及せしめ給ひ、上巳の雜遊の如き、女院の行はれしものが史料の存する限りにては最古のものなりといひ「近世風俗史の範圍より見たる京都の舞妓」(同人、歷史と地理)は當初に於て舞踊を以て生活する普通の女たりし舞妓が强迫的戀愛關係の束縛を蒙るに至りしは江戶中期以降の事かといへり。更に「千秋萬歲と大黑舞附猿舞はし」(岩橋小彌太民族と歷史)は、萬歲の平安朝末に存し大黑舞、鳥追の近世期に起りたらんも其詞章は室町時代にありといひ、「日

本人の座り方に就て」(入澤達吉、史學雜誌)は今日の座り方を一般にするに至りしは恐らく元祿享保以來生活が優長にして餘裕を生ずるに至りしためにして以前は專らアグラなりしが如く特別に敬意を表する場合に限りて此座り方を用ひたりといへるは今日の風俗の大部分が近世期に起源を有する事を暗示するやの感あり。「行住座臥及び拜」(赤堀又次郎、歷史地理)は是等のすべてが廣き意味の宗教的精神を含むとして解釋せんとせり。「京阪人の特性に就いて」(魚澄惣五郎、京阪文化史論)は京都は煮え切らぬ悠長なる所に、大阪人は進取的なる所に其特性を認めたり。

最後に史料につきて一言せんに、「藤原良經の筆蹟について」(龍肅、歷史地理)は從來良經の眞筆として的確なるものなかりしが、最近に發見されたる仁和寺の理趣品の末尾は、其奥書より推して彼の筆蹟に相違なき事を斷じ「醍醐寺の史料と南朝文書」(八代國治、美術畫報)は醍醐寺に南朝關係の史料の現存するは、報恩院に文觀僧正のありし事及び成賢僧正が八條女院の御歸依を受け、女院領南朝に傳はりし事等に存すとなし「久原文庫藏假名

東鏡」(吉澤義則、史林)は同書が中野等和のそれとは別種のものにして、北條吉川二本により內容項目の充實を計りしものらしく、紙質、字體より考へて或は中野等和以前のものならんと推せり。東京帝國大學史料編纂掛より「大日本史料」第四編補遺、第六編之十七、第八編之六「大日本古文書」追加七、家わけ第七金剛寺文書、幕末外國關係文書之十三、を刊行せるは京都帝國大學文學部より「滿濟准后日記」三冊を上梓せる事と共に注意すべく又多年史料の出版に盡力せる國書刊行會が「本朝通鑑」の刊行を完成し「橘守部全集」の發刊「古事記傳」の再刊を續行し日本史籍協會が「久世家文書」「勸修寺經理日記」「岡山池田家文書」「萬里小路日記」「昨夢記事」を刊行し、平安考古學會が「羅山先生詩集」を發行せるも併せて特記すべし。而して探勝旅行の氣風頓に盛んとなりしも昨年中の著しき現象と言ふべく從て此方面に於ける栞の多く印行されしが、就中著しきものに「京都史蹟案內」(京都帝國大學學友會)が改版されしを初めとして「正倉院の栞」(小野善太郎)、「西國古寺めぐり」(木村小舟)、「奈良と西京」(佐々木恒淸)、「日本佛像物語」(木村小舟)、「佛像綜覽」(柴田治

惠）等ありし事を擧げて筆を擱かん。〔中村〕

朝鮮史　昨年の斯界の特種現象は（一）在鮮邦人學者の研究の比較的多く公にせられしこと（二）日鮮同族說に裏書を加へむとするもの多かりしこと、なり。一部の單行本となりて現れしは朝鮮語學史（小倉進平）にして朝鮮に於ける外國語研究の沿革を調査し辰韓、馬韓、辨韓、濊、沃沮より日本、支那、滿洲、蒙古、女眞、契丹諸語に對する眞摯なる研究を發表せり。或は帝釋の孫或は朱蒙夫妻の父等の諸說ある「檀君」は其原型、北朝鮮傳說上の最初の君長傳說なれば南鮮と關係無く南鮮は寧ろ新羅の祖赫居世を祖王とし崇拜すべきものなるを提說する「檀君傳說に就きて」（高橋亨、同源）あり、朝鮮民族は先住の倭人系、滿洲方面より南下せし扶餘系、支那よりの漢人系、の混淆し我內地と民族的要素を同じくするをいふ「日鮮兩民族同源論梗概」（喜田貞吉、同誌）あり。曾尸茂梨の新羅の都慶州なる、瓠公の日本人なるは以て「同源史徵」（幣原坦、同誌）とすべく「先づ朝鮮語の研究より」（小倉進平、同誌）觀ても日鮮共にウラルアルタイ語族にし日鮮人は太古同じ場所に住し、後分離移住したるものなれば「日鮮人は同源なり」（鳥居龍藏、同誌）と叫べる、何れも第二の特種現象なり。「朝鮮人の姓に就て」（小田幹次郎、朝鮮）は家に附けるものに非ずして人に附けるものなれば家の變更に當りても變ぜずして男系の血統を表象する結果となるを論じ「朝鮮になくして日本內地に傳れる崔致遠及金雲卿の詩」（山田孝雄、同源）は何れも大江維時撰の千載佳句藤原基俊撰の新撰朗詠集中に發見せるを說く。「三國史記の稱元法並に高麗以前の稱元法」（小田省吾、東洋學報）は三國史記が高麗時代一般の稱元法を襲用せるに拘らず其記事には誤謬ありとて之に對する東國通鑑の訂正並に三國史記年表と三國遺事年末との異同關係を論じ、又其論贊に政治上高麗に併合せられたる新羅の却つて血統上高麗を併合したる如く現はる、「三國史記新羅紀結末の疑義」（荻山秀雄、東洋學報）を闡明するあり。而かも第四世紀の末より第五世紀に亙る扶餘出の高句麗族南下は長壽王の南方侵略主義と相俟ちて重大事件なるが此「朝鮮半島最初の危機と日本」（小田省吾、同源）が韓族を後援して其併合を免れしめし因緣を叙するあり「龍岡古碑の年代考證」（小田幹次郎、朝鮮彙報）

は黏蟬碑を研究し李王家圖書室所藏中に「朝鮮信使の使用したる日本地圖」（荻山秀雄、同源）あるがこれ明和元年度の通信使趙曮一行の使用したる十五萬分一のものにして日本人の作を摸寫せしものなるを注意せり。「朝鮮風俗妾について」（小田幹治郎、朝鮮）は其種族保存主義に起因したるものなるも、やがて世俗に傚ふことゝなり、又一方鮮人の妻の概して年長なるも此俗を助長せしめしことより家族として夫家の戸籍に編入するに至れる徑路を論ぜる又「民俗と方圓」（八木奘三郎、同源）の關係より日本と支那と互に一致し朝鮮と滿蒙と連絡あることを指摘せるは洵に奇想と謂ふべく、「釜山鎭の日本城址と鄭公壇」（名越那珂次郎、歴史と地理）の歴史地理を論じ二者の中一を釜山浦城、他を釜山子城と命名すべきの妥當なるを提說せり。〔那波〕

東洋史　昨年の斯界大勢は各種方面共進運を示し就中月刊雜誌「支那學」が京都帝國大學支那學出身の新進學者に據りて創業せられしは特筆に値する現象なり。政治、經濟、史上夙に「龔自珍の農宗說」（小島祐馬、經濟論叢）の如く、一種の理想狀態を古代に想定し之より演繹的に家族制度と農業經濟とを結合する一種の社會政策を唱へしあり。又「支那古來の限田說」（同人、同誌）が董仲舒以來人民私有地無制限制度と公有均田制度との折衷案なる、「漢の武帝と支那歴代の財政策」（同人、東亞經濟研究）にて漢代人民の要求する所は富者の横暴を抑へ貧民を塗炭より救ふにあれば武帝も亦社會政策的着色を以て國家收入の增加を謀りしなどを注意し、清朝の輕賦政策と歲計增加の原因を討ね外債問題救濟整理問題を論じて「支那の財政」（安東不二雄）を研究せり。「內莊宅使考」（加藤繁、東洋學報）にて唐代內莊宅使の職掌を探り「稍の意義に就いて」（同人、同誌）之を一本橋と解せず當時民間に行はれし貨物買占利益獨占の風習を呼べる語と見、或は「日支貿易港としての寧波港」（柏原昌三、歴史と地理）が宋の淳化三年定海港に置きたる市舶務を其靈橋門內に移遷して後發達せしも我が要求に係る開港が、明の欺僞的外交にて成立せずして明治四年に至りしこと「日明勘合の組織と使行」（同人、史學雜誌）を闡明し、永樂、宣德勘合の制書を論ずる等、皆參考に資すべく、其名の夫妃馬祖祠に起りしマカオ港の葡人の征服獲得の結果、支那皇帝

の敕許を僞造せし始末は「葡萄牙のマカオ植民地の起原」（矢野仁一、史林）に釋明せらる「北宋貨幣史論」（稻葉岩吉、東亞經濟研究）「支那の銀に就いて」（水田淳亮）「太湖の史的研究」（須賀虎松、東亞攻究會會報）もあり。若しそれ特種研究に至りては古くは「禹貢論」（田崎仁義、國民經濟雜誌）を掲げて本文批評より起筆し禹貢の初より文書記錄として存し禹より孔子に至る千七百餘年間に多少の增減變化はありしならむも經濟上より觀て治水事業の計畫的組織的勞働、機械の使用、土木工業上の技術の知識存し社會上より觀て賜姓の注意すべく文化上より觀て地理地質博物物理數學の知識大に進歩せりと觀たる。「九流王官に出づるや否やの議論に就いて」（岡崎文夫、支那學）章學誠の所說に反對する胡適の新說を紹介し此種の研究の宜しく實證的發展的に其歩を進めざる可からざるを主張せる、古くは師傳として漸くにして儒字となりて周禮に現れ孔子及び其學を爲す者を呼ぶに至りしは孔子卒後間もなく齊人が魯の學者を嘲笑的に呼びしに始るを論ぜる「儒の意義」（狩野直喜、藝文）論あり「支那龍傳說攷」（那波利貞、東亞攻究會會報）は蛇傳說に起原するもの、時代の降るまゝに理想化せられ段末周初之に埃及起原の鰐魚傳說印度起原のナガ傳說加はれるをいひ「左傳の制作年代に就いて」（橋本增吉、史學雜誌）七十六年周期法の戰國初期、十二年周期法は漢初、三統曆法は漢末のものなれば、略其時代を決定し得るといふに對し「再び左傳國語の製作年代を論ず」（新城新藏、藝文）こて紀元前三百六十五年前後は曆法上注意すべき時代なるを論じこれより見て劉歆僞作說の寃を雪ぎ、施きて「漢代に見えたる諸種の曆法を論ず」（同人、同誌）れば十九年七周法、四分曆、三統曆、太初曆、殷曆、顓頊曆より春秋より太初に至る曆法及び干支紀年法の發達を述べ鄧平の八十一分法に超辰法を附加して三統曆を完成したるは劉歆の功績に歸すべく三統曆迄は外國傳來の迹無きを論ず。佛敎の一大疑問なる「漢明求法說の研究」（常盤大定、東洋學報）は牟子四十二章經の研究より明帝求法說を否定し白馬寺の名稱の西晉末に起るをいひ、偶之と時を同じくして「白馬寺の沿革に關する疑問」（那波利貞、史林）を提出して佛敎の私的交通に據り成帝哀帝頃に傳來し黃老神仙の影に隱れて潛勢力を養ひたること及び攝摩騰等の

留りし建物は賓館と觀るべく白馬の寺名を得しは西晉頃なるかをいへるもあり。「道教概說」（常盤大定、東洋學報）は道家と道教との關係、成立道教の一般道教の尊體道經に亙り總論し「周末に於ける地方の開發」（那波利貞、藝文）も戰國社會に因襲的道德思想絕滅し言論の自由、實力の競爭百姓の窮乏金力萬能の世態は萬事に流行的傾向を帶び都市の發達膨脹は地方開發に資せしこと多きを論ぜり。其他「墨子の社會說に就て」（宇野哲人、東亞之光）「支那の回々教徒」（三田了一、東亞經濟研究）あり、「汲冢書出土の始末に就いて」（神田喜一郎、支那學）咸寧五年出土、太康元年官收、翌二年校讀と解釋せるあり、天皇の字の神仙說道教思想より來由するを謂へる「天皇考」（津田左右吉、東洋學報）あり、「魏晉南北朝時代の文學論」（鈴木虎雄、藝文）は一昨年來の後を受けて北朝の文體修辭の方法より其趨勢を論じ純文學排斥說あるを指摘し、蒙古歷代の帳幕沿革は「元朝幹耳朶考」（箭内亙、東洋學報）に論述せられ「元曲に見えたる支那の婚俗」（浦川源吾哲學研究）にて指腹爲婚及び彩樓を結びて婚選することを考證せるあり、遠くは家系より近くは時勢閱歷の影響

を受けて病弱の身能く知情意の發達せることの偉なる所以をいへるは「王陽明の性格を論ず」（三島復、東洋哲學）る一篇にして、明末清初曆局と欽天監との學識を論評するは「支那の數學」（三上義夫、東亞之光）の一篇なり。「支那に於ける西洋學」（矢野仁一、支那學）が明末以來流傳せられ、地圖、油繪、洋琴等支那の斯技に影響し康熙時代の銅版、製圖術、嘉慶代の活版乃至曆局の發達、米國教會の教育上活動せし事蹟は亦之と併せ見ざるべからず。元人にして廣輿圖以外に事蹟の知られざりし「地理學家朱思本」（内藤虎次郎、藝文）も今や貞一齋詩文稿出でし爲め略行蹟を察知し得られ、康熙年間古文を以て海内の重望を負ひたる「方望溪の軼事に就いて」（狩野直喜、支那學）漢學派の側に在る錢大昕の放てる文疵論を辨明せるあり、清の乾隆嘉慶の際、漢學中の哲學派獨り全盛の時新に史論創闢の境を成せる「章實齋先生年譜」（内藤虎次郎、同誌）は宇内唯一の全集原稿本を得て審にせし結果の發表にして「劉師培の學」（小島祐馬、藝文）は劉文淇以來の家學履歷並に環境時風と異なる所以の論述なり、「支那に於ける甘蔗及砂糖の起源に就いて」（加藤繁、東亞經

濟研究)、「明代の屯田」(清水泰次、同誌)亦有益の文字とす。十字寺の景教遺文西夏學小記をいふ「讀書隨筆」(石濱純太郎、支那學)も啓發する所多し 歴史地理方面の重要論文は「イブンコルダートベーに見えたる支那の貿易港殊にジャンフウとカンツウに就いて」(桑原隲藏、史學雜誌)とす。之は前年の後を繼ぎ船舶速力より計算してカンツウを支那の中央に近き江蘇浙江地方に擬定するの妥當なることより膠州、江州、永平諸説を駁し水禽問題シラ問題等八項の理由にて揚州説を主張し、ジャンフウは福建泉州説を採り建昌、杭州、揚州諸説の成立せざる理由を論證せり。「廣東の商胡及廣東長安を連絡する水路舟運の交通」(中村久四郎、東洋學報)は廣東の商胡、長安の南海郡船より南北連絡の運河に就いて商胡の揚州に波及し、揚子は、洞庭湖上に客舟貪利の賈胡ありしこと、並に廣東より珠江、西江、桂江、灕水、湘水、洞庭湖、揚子江、淮水、運河、泗水、沽水、黄河、渭水を利用し長安に交通せしをいふ。「赤土國考」(高桑駒吉、史學雜誌)「赤土國に就いて」(同人、東洋哲學)が隋書に見ゆる此國の新唐書南蠻傳の驃國屬部中の僧迦、又南海寄歸傳南海十一州中の莫訶信州なる説を主張するも論爭は愈烈しく「赤土考補遺」(桑田六郎、東洋學報)出で、愈底止する所を知らず近來の學戰なり。又元史に見ゆる乃沙不耳の記事が類似地名なるファルスのシャプールと混同せられて考證せらるゝ傾あるをいへるは「乃沙不耳考」(高桑駒吉、史學雜誌)にして清の順治年代、遼東、遼西連絡の重要道路にして遼河を渡り、西北して彰武臺邊門を出で、清河門より入邊し義州錦州に至るもの、康熙以來廢せられ、明清交替の史實研究上、漸く忘れられむとするを注意するは「都爾鼻考」(内藤虎次郎、史林)なり。法制關係にては煩雜なる唐制に學びて而かも其弊害を除き、組織簡にして要を得たることを比較論證せるは「王朝の律令と唐の律令」(桑原隲藏、歴史と地理)にして「唐律に見えたる斷屠月に就いて」(那波利貞、支那學)斷屠月の期たる正五九月を忌む習慣の必ずしも佛教思想に起原するものと見る必要無く、匈奴、鮮隼、高句麗にも略同樣の風あれば蓋し立春夏至秋分の自然的現象を尊敬するに起原し又食料問題よりも考證し得べきことを提説す。「支那憲法制定事業の沿革」(有賀長雄、外交時報)は統治權移轉の次第臨時約法

の立法主義を批評し數千年間人によりて治められ、法によりて治められざる支那は傑士の出で、國政の實權を掌握し其本心より立憲政體の必要を感じ自ら憲法を講究し其の制定に熱心するに非んば不可能なるを謂ひ「支那法と孝道」(東川德治、法學志林)は末本の關係にありて支那法は倫理の幇助孝道の擁護を目的とするを例證し「支那法と言論」(同人、同誌)亦歷朝政府の言論自由を認め陳言の途を廣め漢以來直言極諫の士を選びて朝政の闕遺を補正せしめしことを論證す。若しそれ藝術方面に至りては「元末の四大畫家」(內藤虎次郎、歷史と地理)黃公望、吳鎭、倪瓚、王蒙は支那山水畫の一系統を爲して以來千二百年後に出で、董北苑以來重んぜられし作意を棄て、率意を重んじ其精神は其以後の時代を支配し四大家の手法を超越して新畫風の創闢を不可能ならしめ藝術の爲めに不能越の法則を立てたるをいひ「文獻上より見たる佛像の起原」(岩崎眞澄、史學雜誌)は此事の表れたる典籍の最古のものにつきて其成立年代を確定し得れば此起原を可なり正確に近き所迄決定すべく蓋し增一阿含などの如き文獻の成立せし時には既に製作せられたるを知るべし

とし「佛教藝術の起原」(同人、國華)は王立大英亞細亞學會雜誌所載のフーシエー氏の論文を紹介批評す。其他藝術方面に關する名論卓說の傾聽に値する者相當に存すと雖も其材料の取り扱ひ上考古學に屬せりと思はるゝものは同欄の紹介に讓れり而かも米國市俄古フヒールド博物館が考古學的に、フヒラデルフヒヤ博物館が好古的に紐育博物館が華麗にボストン博物館が鑑賞的に支那の美術品を蒐集し陶磁器は其發達の初期より淸代に亙り、彫刻は六朝唐代の代表的作品を集め、繪畫は宋明の秀逸を集むるも繪畫の鑑別は米人に可なり困難なるをいへるは「米國に於ける支那の美術品に就て」(松本亦太郎、國華)注意すべきことゝす。音樂には琵琶の音律と笙のそれとの關係を論じ呂調と律調との構成を說きたる「東洋音樂研究餘談」(田邊尙雄、東洋學藝雜誌)あり。批評には「ラウファー氏の新著『シノ、イラニカ』」(桑原隲藏、史林)あり、これ近來の大著たる此書に對して權威ある批評を下せるものにして就中張騫の植物將來說、石榴、葡萄酒、杜瑗の經行記、瑟之、ササン王朝の稱號、支那國號の起原、諸問題にては嚴正なる批正を加へたり。旅行記にて

「續清國旅行談」(塚本淸、東洋學藝雜誌)は愈面白く「燕吳載筆錄」(那波利貞、歷史と地理)は萬壽山、耶律楚材墓黃寺京師圖書館武英殿に及べり。〔那波〕

西洋史　一般的性質の論著としては文化史的態度より古今に亙れる歷史的潮流を尋究せる「概觀世界史潮」(坂口昂)先づ衆目を惹くべき述作と稱すべく「參考西洋歷史」(龜井高孝)は著者多年の經驗と研學とによつて編述されたるものにして好箇の參考書たるを失はず。興亡史論叢書中に出でたる「海戰史論」(ダリウ氏原著、加藤松宮兩譯)「近代建國史」(瀨川秀雄編)「史論叢錄後篇」(大類伸編)は孰れも讀書界に西洋史學研究の興味を鼓吹するの効果尠少ならざるべし。尙類書としては外交時報社發行の通俗國際文庫の諸編亦平易に最近歐米諸國の狀勢を論述せる歷史關係の編纂物として注目すべきものたり卽ち「最近の露西亞」(稻原勝治)「米國東漸」(石川實)「外交舞臺の佛國」(西山重和)「土耳古廢頽史」(長瀨鳳輔)「巴爾幹の將來」(同人)「列國の產業戰」(稻原勝治)の如き一般人士の要望せる當面の必要なる國際的知識を提供せるものなり。稍特殊的性質のものに屬すれども、ソロビヨフ以後に於けるロシヤ史の權威として世界的盛名を馳せたる故クリユチエフスキー氏の名著が「ロシヤ國史講義」(堀竹雄譯、史學雜誌)の題名の下に邦譯を試みられしは吾人の甚だ慶幸とする所なり。而かも既出の部はホガルトの英譯に全然省略し居れる一般的概論の箇所なれば其忠實嚴密なる譯述は殊に有益に感ぜらるゝものにして、眞箇學術的なる露西亞史の知識が甚しく缺乏せる本邦學界を啓發する所鮮少ならざるべし。最近世史現代史關係のものには「フランス大革命史後編」(箕作元八)及び「世界改造の史的觀察」(村川堅固)の兩書注目すべき勞作なるべし前者は恐嚇政治の萠芽を發せる時期より說き起して大革命の終末期に及べるもの、多數の口畫挿畫と相照して恐怖時代の佛國政治社會內外の形勢を說く事詳密精到を極めたるを觀る。後者は前年に試みられたる講演を基礎とせしものにして大戰後の改造を受けたる世界の形勢に對し其由來卽ち史的根據を示し改造事業の史的因緣と其關係を絕てるものにあらざる所以を力說し史的知識及び考察の忽諸に附すべからざる旨を表示せるものなり。其他の時代に關しては一般的政治史的論著として特記すべ

き論著に接せず相變らず西洋史界の寂莫を嘆ぜしむる所以なるが別に宗教、學藝、經濟及び歴史地理などに關する文化の特殊方面を取扱へる述作論議には吾人の注意を喚起すべきもの空しきにあらず。宗教史に就きては「基督教史の研究」(野々村戒三)最も尊重すべき勞作として擧げざるべからず。本書は多年基督教史の研究に沒頭せる著者が新舊聖書や耶蘇傳、教會史、教義史に關する論究を初めとなし近世英國神學の主潮、近代の佛國に於ける宗教思想の推移、十九世紀上半期の米國神學、近代的基督教の特徴等の諸問題を取扱ひ居れり。「世界宗教一揆史」(内藤智秀)亦一部の要望に應ずべき便宜の述作と稱すべし。藝術史の方面に於ては「古代埃及の藝術に就いて」(松本文三郎、哲學研究)あり古王國中古時代新帝國時代に亙れる埃及の國勢と一般文化生活を背景とせる藝術界の推移各時代の特相を論述せるものにして、著者最近の遊歴と其觀察を筆に上ぼせし「埃及旅行記」(同人、史林)の興味深きナィル河畔遺跡蹈査談と併せて埃及古文明を研究するもの、好指針たるべし「デラ・ロビアの彫刻」(濱田耕作、藝文)は伊太利復興期の彫刻家として一異彩を

放てるルカ・デラロビア及び其甥アンドレヤ・デラ・ロビアの特技と稱せらるゝ陶像小兒像に就きて說けるものなり。「英國劇の起源」(木方庸助、藝文)は中世英國劇の起源探究の方法として先づ古典劇、羅馬喜劇並びに中古樂詩人との連鎖を尋ね辿つて祭式舞蹈に基づく希臘劇の起源より演劇の一般的起源を探りて以て英國劇の淵源を發見せんと試みたるものなり。科學史の方面にては「中世回教徒の地理的文獻」(飯田忠純、三田評論)「中世アラビヤ人の數學」(同人、同誌)は一は純正科學的の要求、好奇心の滿足、實際的必要より其發達を促成せしめられたる回教國の地理學を說き其主要なる文獻を擧げ他はアラビヤ人が希臘人の數學上の知識と印度の算術を輸入して其自國語飜譯を行ふと共に外邦より享けたる數理の知識を能く咀嚼してこれを一般に普及せしめたる功績を說きしものにして、相共に中世回教國の學術史上に於ける貢獻の一端を表示せるものなり。經濟學史の方面に於て特筆すべき刊行物は「經濟史研究」(高橋誠一郎)にして著者が多年の研學結果を逐次三田學會雜誌其他に公表せる主として近世英國思想家經濟學者の懷抱せし所說に就きて紹介

且つ論議を試みしものを蒐錄せし好著なり。經濟史社會史關係のものには「中世ギルド頽廢の原因」(井筧節三、太陽)あり、專らヂョルヂ・ルナアルの「中世紀に於けるギルド」に據り中世ギルド制度の利害得失を擧げ其頽廢の外的原因として通商上に於ける販路の擴張及び其結果、思想界、政治界に於ける時勢の變調を說けり。歷史地理上の研究として「オスティヤの過去現在未來」(寺田四郎、歷史地理)の一篇注目に値すべく羅馬時代に繁榮を誇りし港市オスティヤの史的沿革を說き其廢墟に對する懷古の感想に資し近き將來に於ける商港としての復活を期待せり最後に「南スラヴ民族の特有性」(內藤智秀、三田評論)は該民族の隱遁的性情を其の信仰に係はるボコミル敎の由來性質より說明を試みたるものたるなり。〔植村〕

考古學　昨一年間に於ける考古學上の調査及び研究に關する業蹟を回顧するに當り先づ最も顯著なりし先史考古學分野より始めんに石器時代遺跡の發掘調査に就いては有名なる河內國府に於て八月中旬淸野博士新たに發掘を試みて四體の人骨と其一より骨製腰飾を得、十二月本山彦一氏の發掘に據つて漸く遺跡全部の調査を了せるを始め備中津雲貝塚亦五月に大串博士の大規模の發掘を行へるあり。三十六體の人骨を獲て同じく略調査を終へたるを擧ぐ可く肥後轟貝塚は七月下旬長谷部博士調査を行ひて人骨約二十體及び石製玦狀耳飾等を發見せり。東北地方に於ては八月大串博士の陸前細浦貝塚の發掘、長谷部博士の獺澤貝塚の調査あり。前者は九體の人骨と共に伴出の遺物として鹿角製の釣針、石棒、繩紋土器の類を獲、後者は發見の人骨は一體に過ぎざりしも耳環、腰飾、土器等に於て津雲其他西國の遺跡との關係を徵すべき遺物を採集して、共に良好なる成蹟を擧げたるを注意す可し。是等の既知の遺跡と共に如上の津雲國府の發掘の終了結果、中國方面に於て、主として人骨採集の目的を以て新たに多くの遺跡の發掘行はれたり。卽ち淸野博士は備中里木、同粒江船元兩貝塚を發掘して、前者にては原始的の繩紋土器を採集し、後者よりは十一體の人骨を獲たり。福原八郎氏は八月備中羽島貝塚を發掘調査して同じく十一體の人骨を發見せしより爾後同地方の遺跡の探究に從ひ京都大學の島田助手は其依賴を受け北浦貝塚、子位庄貝塚、船元貝塚、備後大門貝塚等の發掘を行

ひ各地に於て土器型式比較研究の資料を收め同地方の史前の研究頓に進めり。九州にては山崎五十麿氏によりて新たに薩摩出水貝塚の報告あり、十二月長谷部濱田兩博士の一週間に亙る調査あり。琉球にては四月大山公爵伊波貝塚を發掘して多數の遺品を獲たり。此外本州中部地方にては池上年氏の三河西尾町貝塚の試掘あり。榊原政職氏亦遠江蛤貝塚を發掘して偶然屈葬の人骨を獲たるを舉ぐ可し。朝鮮の方面にては古蹟調査事業の一部として鳥居龍藏氏の一般的調査の咸鏡兩道を終れる外濱田博士梅原囑託は有名なる金海貝塚の分層的調査を行ひて同貝塚の積成を明にし且つ貨泉を發見して重要なる記錄を作れり。是等の調査は何れも緻密なる科學的の方法を以て個々の遺跡の狀態を明にせるものなるを以て其範圍の擴張は研究の基礎の確立上最も重要視すべきものなるは言を俟たず。なほ鳥居龍藏氏の四月より五月に亙りて信濃の史前の遺跡を探り、又八月より九月に岩代越後佐渡の石器時代の一般的調査を行へることも記すべきならむ。是等の調査は「三河國幡豆郡西尾町貝塚に就いて」（池上年）と出水貝塚の試掘報告なる「薩摩國出水貝塚に就て」

（山崎五十麿、以上考古學雜誌）の兩編の公にせられ其前者の特に土器に就て精密なる記述を試みたる外は「信州の有史以前」『有史以前の跡を尋ねて』（東京日日新聞）なる鳥居氏の紀行の發表ありしのみにて、何れも其性質上發表を本年以後に殘されたるを見る。蓋し昨年研究の發表として見るべきは前年若しくは以前の調査に係るものなりとす。

遺跡の學術的調査の結果の公刊としては「河內國府石器時代遺跡第二回發掘報告」（濱田耕作等、京都大學考古學研究報告第四冊）あり。前年京都大學の長谷部博士と協力して試みられたる第二回發掘に關する調査の經過と、發見の石器、土器、身體裝飾品等に關する考古學上の事實の正確なる報文にして其人骨に伴出する繩紋土器の性質を究めて第一回の報告書の原始繩紋土器なる名稱よりも寧ろ國府式土器なる名稱を採る可きを云ひ屈葬に就いて廣く類例を求めて其來由を究め國府遺跡を原日本人のものとなす嚮の所說はこれを信ずるも、內にアイヌ的要素を混ずることの多きを認めたり。「河內國府石器時代人骨調査」（長谷部言人、同書）は此際出土せる人骨に關す

る人類學上の精密なる研究の結果を錄せるものにして、我石器時代人骨に關する報告としては最も整美せるものなり。其結論に於てアイヌに近き骨骼を有するものあるを云へり。「備中國淺口郡大島村津雲貝塚發掘報告」(島田清野等)「肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚發掘報告」(濱田耕作榊原政職、以上京都大學考古學教室第五冊)は前年清野博士の京都大學考古學教室の助力に依りて行へる兩遺跡の考古學上の報告にして豐富なる圖版と相待つて遺跡の狀態發掘の經過と遺物の特質を擧げ殊に土器に就いては精緻なる觀察を試みたり。「備中國淺口郡大島村津雲貝塚人骨報告」「肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚人骨報告」(清野謙次、同上)は如上の發掘出土の人骨研究の第一部として主として其出土狀態に關聯せる研究を發表せしもの、就中前者は人骨埋葬狀態の小兒の骨の壺に納めたると、二體の仲展葬を除きては何れも屈葬にして骨骼の一部の甚だ不自然なる位置に存するものあるは軟部組織の腐朽するまで周圍に一種の空隙の存在を認めしむるものなりと說き、附隨の裝飾品を詳記し人骨各部の相互的位置及埋葬方位に關する調査よりして其頭位は大部分東南より東を含みて北に至るの方向にあるを注意し、これを當代人の太陽崇拜の思想と關聯せるものならむと解せり。「地學上より見たる越中氷見の洞窟」(佐藤傳藏、地學雜誌)は先づ遺跡所在地附近の地形地質を記して、洞窟の海波の侵蝕作用に依り生ぜるを擧げ內部に於ける遺物埋沒の六層より成れるを注意して、第五層以上は彌生式なるも第六層は繩紋土器を出せしを明にし此遺跡の當代人の住居址なるを說けり。「宮戸島里濱貝塚の分層的發掘成績」(松本彥七郎、人類學雜誌)は前年七八月に行はれたる同貝塚の分層的發掘の結果による土器片に就いて器型文樣の數量の精密なる調査を試みこれより土器の變遷を徵せむとせり。「琉球萩堂貝塚」(松村瞭、東京大學人類學教室報告第三冊)は前年春發掘調査の研究報告にして遺物としては石器土器貝器等の外、貝殼、哺乳動物の遺骨、魚骨等に就いて何れも專門學者の研究を載せ其土器の文樣は特に意を用ひて一々の性質を點檢し同貝塚通有の一種の直線又は點線の彫紋の本源は繩紋にありとして、これを九州南部に於ける同式土器に比較して所謂アイヌ石器時代土器の、南に押されて生ぜし型式ならむと云へり。更に

各地に於ける遺跡の報告の類には近畿に「湊村函石濱石器時代遺跡」(梅原末治、京都府史蹟調査報告)の一編の遺跡の綜括的記述を試み前年同會委員の發掘調査の結果をも併せ錄し遺跡の性質は石器代より金屬器代に亙れる住居址にして發見の貨泉より兩者の中間なる金石併用時代の年次を推し得るこ共に亦彌生式土器の變遷を窺ひ得るものありこせり。「若狹及越前に於ける古代遺跡」(上田三平、福井縣報告書)は其前半に於て繩紋土器を伴出する越前石徹白及び温見、同陣ヶ岡、北堀貝塚等の遺跡こ同國河和田及長屋を中心こせる彌生式系統の石器時代遺跡に就て遺物遺跡の忠實なる記述を試みたり。關東の「武藏野の有史以前」(鳥居龍藏、武藏野)は關東石器時代の總論にして出土の繩紋土器に厚手こ薄手の兩種ありて其分布を異にするを注意せしものなり。九州方面にては「大甕を發見せる古代遺蹟」(中山平次郎、考古學雜誌)の雄篇あり。前年來著者の熱心に討究せる九州北部の彌生式遺跡中一種の甕棺こ認めらるゝ大甕を出す遺跡を總括して伴出の遺物より其の金石併用時代に屬すべきを明にせるは銅劍銅鉾の研究に寄與する處多し。「土器の有無未詳

なる石器時代遺跡」(同人、同誌)またその一なり。

さて此先史考古學研究の機運の隆盛は一に人骨の發見に依り解剖學者の遺跡の科學的發掘を行ふに至れるに基くもの多きが、資料の續出こ共に今や是等人骨の調査より來る當代人の體質に關する研究の漸次成果を見つゝあるを特記せざるべからず。昨年に於ては特に拔齒の風習注意を惹けり。之に就いては既に前年小金井博士の研究ありしが更に年初「日本石器時代人の齒牙を變形する風習に就て」(同人、人類學雜誌)を發表して、其後獲たる越中氷見、河内國府、尾張熱田等の遺跡出土の人骨に依つて更に考察を進め是等人骨の出土狀態こ其特徵を擧げて此風習は單にアイヌ式遺跡のみならず熱田氷見等彌生式遺跡に關聯する民族にも存せるものにて最も多き標式は上顎の兩犬齒を除去するにあるを說き廣く世界の諸民族の土俗こ對比し齒牙變形の目的動機に論及して春機發動期に達せる徵證こして又不仕合及喪に遭遇せる悲哀を表す爲なりこせり。而して文中隨所に我か石器時代人種の二大別あるを說けり。「石器時代人の拔齒に就て」(長谷部言人、同誌)に津雲、國府〻骨の拔齒の樣式を檢してこ

れを小金井博士の先に明にせる關東及東北の人骨のそれと對比して異同を擧げ抜齒の時期に就いて考察して其成年を認識する表示として行はれたるべきを推し風習の極致の恐らくは津雲の如く女子が多數の齒を抜き男女間に明白なる差別を存せる際にあるべきを臆測す。「津雲貝塚及國府石器時代遺跡に對する二三の私見」(大串菊太郎、民族と歴史)は單に抜齒のみならず主として風習上の見解を錄せるものにて出土の人骨の埋沒狀態を檢して當時東を重要視せしを注意し遺跡は一種の墓地なるもなほ幾分屍體遺棄の觀念を混じたりと云ひ一々の人骨の抜齒及び齲齒に就いては精密なる調査の結果より抜齒の風習の第二咬耗度に達せる時代に行はれたるを擧げ出土の裝飾品及び土器等をも觀察して津雲國府の所謂アイヌ系統に屬するを云ひ兩者の相違に注意して國府遺跡の津雲よりは遲れて發達せるものならんと論じ「二三石器時代遺跡に於ける抜齒風習の有無及樣式に就て」(松本彦七郎、人類學雜誌)は關係の論文を點檢し陸前青島、宮戸島、備中津雲諸貝塚、出土の人骨に就いて同風習に關する詳密なる觀察を錄し抜齒の年齡には若干の幅ありて壯齡に達して間もなく開始せられたるべく更に一々の遺跡と風習との關係をも考へ從來の資料を表示せり。特殊の研究にはなほ「古人骨に赤色色料の附着せる例」(小松眞一、同誌)は越中氷見、陸前宮戸島兩遺跡發見の人骨に存する此の性質に就いて從來の諸家の說を擧げ其風習は南方熱帶地方に行はるゝもの多しとするも北方民族にも存るを注意す。「石器時代人の蹲葬に就て」(長谷部言人、同誌)は蹲葬の一般概念を說きて後、我が石器時代遺跡出土の人骨に就いて當時此の葬法の廣く行はれたるを認め國府、津雲等の例より推して其概ね東方を枕とせるの多きは太陽の光の死者を蘇回せしむるを怖るゝの爲めなりと云ひ蹲葬本來の意義に就てはAndree氏の說に贊せり人種論に亙れるものには「石器時代のアイヌ民族に就いて」(喜田貞吉、民族と歴史)の國府津雲出土の人骨のアイヌ系統なるを高潮し我石器時代にアイヌの古く關西にも分布せりとの主張を繰返せる「彌生式土器の原始物に就いて」(大野雲外、歴史と地理)の同土器の或物の原形の瓢簞の類より來れるものあるは肩に圓孔を穿てる同式土器の存在と共に其使用の民衆の南方系統に屬するを云へるの二編を擧

け得べし。なほ朝鮮滿州の方面には「有史以前の日韓關係」(鳥居龍藏、同源)の同地の石器時代の我彌生式と同系統なるを說けるを見たると共に「東亞の石器類と民族關係」(八木奘三郎、滿蒙の文化)は東亞諸國の石器時代研究より其狀態を概說し、原始繩紋土器說を否定して進んで本邦と朝鮮との石器時代の同化說を疑ひ朝鮮のものは麕製多くして時代新しきにあらざるかと云へり。「西伯利亞の有史以前」(鳥居龍藏、人類學雜誌)は前年の實地調査の結果の概報にして同地方出土の土器に注意して彌生式系統と共にニコリスク附近より東の邊にアイヌ式土器の存在を確め人類學上の解釋を加へたるは特記すべきなり。

次に古墳墓及び關係遺物に就いて見るに內地にては其學術的發掘調査は如上史前時代の盛運に比して殆んどこれを見ざりしも昨年新に內務省に史蹟名勝天然紀念物保存會の設置せられて學者の實地調査を開始せるは數年來の各府縣の古蹟調査事業と相待つて將來良好なる効果を齎す可く昨年五月京都府史蹟調査會の山城大枝村妙見山大古墳を調査して古式墳墓の構造上に重要なる資料を得たること、熊本縣調査會の縣下小坂村一古墳の內容を明にせるが如きは其特記すべきものならむ。土木工事其他に依れる遺跡の偶然の發見は比較的多かりしが就中紀伊國日高郡にて銅鐸の出土、河內中河內郡に於ける陶棺の發見讃岐國圓座村の甕棺を藏せる古墳等は其著しき例なり。朝鮮方面は其の學術的調査は頗る好成績を示して谷井學士は慶州に於て周圍に護石ある方形古墳の內容の精査を行ひまた星州にては加羅時代の大なる古墳を調査して構造上の特色を究め十一月馬場、小川兩氏は梁山の古墳の學術的調査を行ひて古墳の型式上にも、將た遺物の研究上にも重大なる事實を收めたるが如きは其著しき二三なりとす。資料の公刊は昨年に於て特に著しきを見たり。卽ち考古學會の新たに「考古圖集」を月刊し「日本埴輪圖集」(解說附錄、高橋健目編)「人類類寫眞集」(埴輪土偶之部、東京帝國大學編)等大部の集成圖の印行ありしを特記す可し。朝鮮にては「古蹟圖譜」第七冊の出版を見たり。遺跡の調査報告及び研究は畿內に於て特に著しきものを見る。卽ち、大和にては「三輪町大字馬場字山の神古墳」(高橋健目、西崎辰之助、奈良縣史蹟報告書)は多數

の石製模造品を出土せる同古墳の學術的調査の結果を載せて塚の古式なるべきを論じ「牽牛子塚」(佐藤小吉、阪谷良之進、同書)は一々詳細なる圖に依りて高市郡越にある同古墳の石室の一石を彫り拔き構作して入口の扉に特殊の裝置を加へ內部に乾漆の棺を藏せる珍奇なることを錄せり。又「銅鏃に就て」(後藤守一、考古學雜誌)は其遺品を出せる同國佐味田貝吹山古墳の構造と遺物に關する報告を載す。山城にては「久津川古墳研究」(梅原末治)あり、久津川の車塚古墳の綜括的記述にして其示す事實に基き所謂前方後圓墳の外形の變遷を考へ應神帝より雄略前後に亙る我が墓制最盛期の構造の一系統を想定せるもの、附錄に「山城八幡町の東車塚古墳」の一編ありて同じく遺跡の構造と遺物に關する研究を載せたり。京都府史蹟調査報告の第二冊には府下の古墳に就いて葛野郡「松尾村穀塚」「川岡村岡の古墳」乙訓郡「向日町向神社附近の古墳」綴喜郡「美濃山古墳」「飯の岡の古墳」等(梅原末治)の調査報告を收む。是等は遺跡の實際の記錄なると共に何れも支那古鏡鑑を藏せる古墳墓なるに於て近時長足の進歩を遂げたる其結果に基き墳墓沿革考の基準を得んと

せるもの「京都府相樂郡相樂村の方形墳」(長江正一、考古學雜誌)は一種の組合せ式棺を主體とせる特殊古墳の報告なり山陰地方にては「出雲に於ける特殊古墳」(梅原末治、石倉暉榮、同誌)前年に引續き未だ完結に至らざるが同國八束、能義兩郡に於ける石棺式石室十數基の詳細なる報告を收め又隱岐に於ける壁畫ある古墳の報告を「考古圖集」及び「山陰めぐり」(香取秀眞)に載せたり。九州方面には「宮崎縣の古墳から貨泉の發見」(山崎五十麿、民族と歷史)は日向宮崎郡大淀町の前方後圓墳より刀劍玉類TLV鏡と共に貨泉を發見せりこの報告にして、附するに宮崎町古墳出土の子持曲玉の記事を以てせるもの畿內以東にては「若狹及越前に於ける古代遺跡」(上田三平、福井縣史蹟勝地調査報告)は、全編の半を兩國に於ける古墳墓の記述に費し忠實に一々の構造と遺物とを錄して學界に資料を提供せるもの、「駿河國駿東郡金岡村東澤田に於ける古墳」(鈴木嘉昭、考古學雜誌)は三室連續の組合せ石室を主體とせる古墳の發掘調査の結果を錄せり上代遺物中特殊の位置を占むる一種の銅器類に就いては特に綜括的記述を見ざりしも前者には「銅鐸(出土地名)

一覽表追加訂正」(梅原末治、歴史地理)をはじめ、「若狭及び越前に於ける古代遺跡」(前出)に從來知られし越前并向、同新及び若狭向山發見の遺品に就いての記述あり。銅劍銅鉾に就ては「南伊豫の銅劍銅鉾」(長山源雄、人類學雜誌)と「考古雜錄」(中山平次郎、考古學雜誌)に對馬國大鋼、壹岐國立石熊野社、豐後松岡村及び豐前宇佐郡法鏡寺等出土の銅鉾に就いての報告を見たり。鏡の研究は石器時代の調査と共に特筆すべき業蹟を示せるものにて考古學會の「紀年鏡鑑圖譜」を公刊して基準となる資料の集成を示せると共に前年物故せる富岡謙藏氏の遺著「古鏡の研究」の出でゝ研究上に一時期を劃せる氏の諸論著の補正せるものを收むると共に未だ發表せられざる多くの新研究を錄せり。就中「畫象鏡考」は遺品の諸型式を網羅して圖樣の西王母東王父の信仰に關係あるを注意し年代の推定を試み「蟠螭鏡考」は支那の古銅器と比較して鏡鑑として最古の型式の一なるを考定し「支那古鏡圖說補遺」は獸帶鏡、內行花紋鏡、繪文樣神獸鏡に關する新研究を錄して終りに氏の到着せる支那古鏡鑑の年代の體系を示せり。「再び日本出土の支那古鏡に就いて」は「日本仿製古鏡に就て」と共に我が古墳發見の古鏡の綜括的研究にして後者に於ては仿製鏡の特色を明にし、共に一々の年代を考へて其示す事實に基き日本の上古の狀態と文化を研究せる最も興味深き論文なり。「銅鏃に就て」(前出)は(四)(五)に於て我古墳出土の支那神獸鏡の資料を綜括分類して、型式の前後を推し其內の一型式なる徐州鏡を以て王莽代とする高橋氏の說を祖述して廣く此の類を漢魏式なりとせり。「禽獸葡萄紋に就て」(濱田耕作、國華)は廣く禽獸葡萄紋の例證を求めて、羅馬、波斯に西紀二世紀の頃に其著しきものあるを擧げ其支那に傳はりて鏡に現はるゝに至れるならむと云へり。「七子鏡考」(喜田貞吉、民族と歴史)は七個の鈴の附せる鏡を以て書紀に見ゆる七子鏡に擬し、此種鏡は朝鮮より傳はれるにあらざるかを說けり。「漢鏡文樣」(後藤守一、藝苑)は邦人の手に成る古鏡を取りて內に表はるゝ鋸齒文、直弧紋、雷紋海盤車文等特殊の文帶に就ての考察を錄せり。鏡以外の遺物の研究にては先づ「古墳發見石製模造器具の研究」(高橋健自、博物館學報)の綜括的記述を擧ぐ可し。一々遺物を圖示して型式を論じ其分布より出土の古墳の構造

を檢して年代の古きを考へ鏡劍の模造の特に多き所以を推すなど興味ある見解を示せり」。鍬形石器の原始物に就て」(大野雲外、人類學雜誌)は所謂狐鍬石の原形の貝にあるを論じ形狀本來一種の利器として使用せしもの、名殘を示せりとす。「巴形銅器」(後藤守一、考古學雜誌)は遺品を綜括して出土の遺跡の狀態を錄して製作年代の古きを推定し、用途に就いては一種の宗教上の標象にはあらざるかとの臆說を述べたり。「上代に於ける鎌」(同人、同誌)亦同じ記述法に依り其石製模造品に論及して性質を考査し「鹿角製刀裝具」(梅原末治、朝鮮總督府古蹟調査報告)は我古墳に例證多き此の遺品を分類して着裝狀態を考へ表面に刻せる文樣の性質と年代に及び此遺品の朝鮮より出土せることの意義を說けり。「本邦古代耳飾考」(喜田貞吉、民族と歷史)は古墳出土の金環、耳鎖、耳玉等に就いて實物と埴輪土偶に示す處を擧げて古文獻の研究と對比し、附するに石器時代の輪鼓形耳飾と璜との考說を以てせるもの後者は「河內國府遺跡第二回發掘報告」と併せ見るべきものなり。

考古學の方面より上代の文化の研究を試みしものには如上「古鏡の研究」の二編の外國史關に收めたる「日本古代の文化」(和辻哲郎、單行)を擧ぐ可し。また「遺物遺跡から見た上代の近畿地方」(濱田耕作、京阪文化史論)は遺物の分布より推して同地方の上代に於ける文化の狀態を概記せり。

奈良朝及び其以降の遺跡の研究は墳墓に「石川年足の墳墓」(考古學雜誌)「因幡に於ける伊福吉部德足比賣の墳墓」(民族と歷史)二編が共に墓誌を藏せる年代の明瞭なるものに就て實地調査の結果を發掘當時の記事と比較して內部の構造を論ぜるもの、山城宇治郡「山科村西野山の墳墓と其發見の遺物」(京都府史蹟調査報告、以上梅原末治)は前年三月發見せる此の遺跡に就いて一種の縱擴なるを注意し正倉院の遺物と對比して副葬品の性質を記せり。寺址關係にては「和泉國禪寂寺の古堂塔礎石」(同人、歷史と地理)の推古式堂塔の配置を有する遺址を紹介し「筑前國大分廢寺址及同所發見古瓦」(高橋健自、考古學雜誌)は梅澤氏の報告に基き遺跡の狀況と發見の優秀なる古瓦とを擧げ礎石に存する所謂水拔き孔と瓦當の顧に文樣あることに就いて考察せり。「興福寺境內地名一

覽」(高田十郎、奈良)は同寺境内に關する新舊の地名を網羅しこれに註釋を加へ寺址の研究上に資せるもの「西寺址」は實地調査の結果に依り其寺址を明にし「考古雜錄」(四)には豐前宇佐郡館村法鏡寺出土の各種の古瓦を紹介して内に推古式の唐草瓦の存するを舉ぐ。宮址の調査には「河陽宮址」(西田直二郎、京都府報告書)の文獻を主とせる考證あり特殊の遺跡としては豐太閤所築の京都四周の土居に就いて詳密なる實地調査に成る「御土居」(同人、同書)の發表を特記す可し。其他「遠州平田寺發掘古銅器」(喜田貞吉、民族と歴史)は開山龍峯上人の廟址より出土せる支那古銅器の模造品に就いて其特質を說けるもの、又大正七年三月紀伊那智にて發見されし佛像其他の優秀なる遺品の「考古圖集」にて紹介せられし等あり。「石鍋」(喜田貞吉、民族と歴史)は肥前雲の津に特に其の粗造品の多きことに就てこれに解釋を加へ、使用の年代に及べるもの、「京畿地方に於ける古瓦文樣の研究」(伊藤清造、考古學雜誌)は前年に續きて主として唐草文　の遺品の發達を論ぜり。我考古學史に關係ある方面には考古學會が昨年其の創立二十五年の記念として近時發見の主なる遺品の圖集を出せること、德川時代の考古家に關する資料を載せたる「十二攷古家資料寫眞帖」(第二集)の印行ありしを數ふ可し。

朝鮮の方面に於ける遺跡の報告は「大正六年度古蹟調査報告」收むる處に「慶尙北道善山、達城、高靈、星州、金泉諸郡慶尙南道咸安昌寧兩郡調査報告」(今西龍)の長編あり。古の加羅の殆んど全境域に亙れる古墳山城其他すべての遺物遺跡の調査を詳記せるもの、其咸安、善山等に於ける古墳發掘調査の記事の如きは特に内地の遺跡の研究上に及ぼす處多し。「平安北道及滿洲高句麗古蹟調査報告」(關野貞)は特に同代の墳墓の構造に關する資料の報告を錄し、「黃海道及平安南北道の調査報告」(谷井濟一)は漢の帶方郡の遺跡其他を、又「京畿道廣州、揚州忠淸南道天安、公州、扶餘、靑陽、論山全羅北道益山及全羅南道羅州十郡古蹟調査略報告」(同人)は主として百濟の遺跡に關する調査の梗概を錄せり。記事頗る簡なるも扶餘陵山里の百濟の壁畫ある古墳、益山の壯麗なる木棺を藏せる雙陵及び羅州潘南面の甕棺を藏せる墳墓の如き重要なる事實を載す。

轉じて支那印度の方面に於ける邦人學者の研究を見るに其佛教美術に關聯し殊に其樣式の系統論に於て著しきものあるを見る。「印度の佛教美術」(松本文三郎)は遺物に基き印度美術の綜括的記述を試み更に支那日本の美術との關係を論究せるもの、「印度の佛教藝術に就て」(關野貞建築雜誌)また略同一の試みなるも其實地調査得たる豐富なる資料に基き立論せる處に特色を表はせり。而して支那六朝藝術の印度の毀多朝の影響を受けたりとの事實は共に一致する處の結論なり。「月支王時代に於ける印度佛教彫像の研究」(松本文三郎、藝文)は近く彼地を旅行して得たる事實に基き先の所說を補正せる新研究にして同代マツラ地方に臺銘ある彫像の多きを云ひ迦膩色迦王三年比丘婆羅造菩薩像を初め當代の代表的作品を擧げ特徵を檢して犍陀羅毀多兩期の彫像との異同を考察して迦膩色迦王代は既に犍陀羅美術の衰退期に入れるものにて其の隆盛期の月支以前卽ち西曆紀元前二世紀乃至後一世紀の中葉に亙るべきを斷じ、なほ支那北魏の造像の毀多朝初期に於けるマツラ派の影響に成れるを云へり。北魏の寺塔建築に於ける印度樣」(瀧精一、國華)は文獻上洛陽伽藍記に見ゆる永寧寺の記事より考察して、其塔婆の印度の影響を受けたるべく靈巖及龍門の洞窟の彫造を觀察するに佛殿僧房は主として支那式なるも其靈巖東洞塔形支柱同三重塔形等印度の塔婆露盤の影響顯著なるありて是等の源流の印度毀多朝の樣式に屬するを說けり、「北魏唐草文樣の起源に就きて」(瀧精一、同誌)は同じく靈巖龍門の浮彫に表はるゝ處に依りてこれを列葉、卷蔓對蔓、團扇形連結式の四者に別ち列葉卷蔓の兩式中には支那本來の文樣に基くものあるも卷蔓式の一種と團扇形連結式の原流とは波斯薩珊文樣に存するを遺物の比較研究より立證し而かも一面支那化せるを注意して之は印度を經ずして傳はれるものにて其媒介物となれるは織物なるべしと結べり。「アジャンター石窟寺に於ける彫刻」(澤村專太郎、同誌)は前年に續き第二十乃至二十二窟の石佛、第一、二兩窟の彫刻を詳述してアジャンター彫刻の一般的考察に於て其樣式に三種の別あり。第五世紀より八世紀に亙る遺物を含めりと云ひ印度の彫刻史上重要なる位置を占むる洞窟の性質を明にせり。資料の公刊には此種研究に關係ある西域の遺品に就いて Pelliot の Les

Grottes de Touen-houang のGrünwedel のAlt Kutscha の公にせられしを擧ぐ可く前者は多數の寫眞版より成り後者には多くの色摺と詳細なる研究を載す。其邦人の手に成りしものには住友男爵の蒐集に係る古銅器圖譜「泉屋清賞」の盛裝して國華社より出でたるは特筆に値す。而して濱田博士の解說は從來の古銅器の研究の記銘のみに依る方法よりも主として型式學上の觀察を以てせしものなるに於て注意すべきなり。

最後に補助學科中特に考古學に密接なる關係を有するものに就いて一瞥せんか土俗學の方面にては「赤子塚の話」「おさら狐の話」「奥州のザシキワラジの話」「神を助けた話」(以上柳田國男)は民族研究の一業蹟として數ふ可く民族心理學にては「著物の起源と其の樣式」「衣服の發達より見たる毛及裸體の研究」(以上菅原敎造)「原始民族の美意識」(渡邊吉治)「卜筮の起源と聯想の形式」「トテミスムの形式」(以上城戸幡太郎、以上心理研究)等其主なるものなり。金石文にては「朝鮮鐘の現狀」(高田十郎、奈良)あり先づ一覽表を擧げ型式、銘文、紋樣、裝飾等に就いて詳密なる調査を錄せるもの「大和の古鐘」(同人、同誌)亦

同國現存の慶長以前の遺品に關する綜合的記述にして大峰本堂の天慶七年の古鐘に就いて種々の方面より疑問の存するを說けり。「東村山村元弘三年板碑考」(沼田頼輔考古學雜誌)は有名なる此の板碑を中心として當代の歷史事實を考證し更に形式上より其の建立者の時宗の僧侶なるべきを推し「山陰めぐり」(前出)は主として同地方に存在せる金石文關係の資料を錄し、特に隱岐の倉印驛鈴に就て考證する處あり、「出雲國光明寺の朝鮮鐘」(高田十郎考古學雜誌)は新たに知られし遺物の報告にして「石山寺の古順禮札について」(中村直勝、歷史と地理)「近畿に於ける慶長以前の石燈年表」(天沼俊一)「日本金燈籠年表」(香取秀眞)は何れも正確なる資料の紹介なり。朝鮮方面にては「新羅名僧元曉の碑」(小田幹治郎、朝鮮彙報)あり。大正三年慶州にて發見せる高仙寺誓幢和上塔碑を紹介せるもの、誓幢は有名なる元曉其人にして、銘文に依り彼の傳記の明にせらるゝ點を指摘し、又孫仲業の日本遣使の記事より我が續日本紀の正確を立證せり。大正六年度古蹟調査報告收むる處の「眞興王拓境碑」及び「塔堂治成文記碑」(今西龍)の二編は、共に昌寧にある古碑の研究「

して、殊に前者は從來未だ學者の充分なる調査を經ざる此古碑に就て、各種の方面より銘文に解釋を加へし最も重要視すべきものなり。なほ「近獲の二三史料」(內藤虎次郎、藝文)の昨年偶然所在の知られたる百濟の扶餘隆の墓誌銘を載せ滿洲松花江邊龍王廟の阿什叶達麟崖字を紹介せるを擧ぐべけむ。〔梅原〕

地理學界

概觀　昨年の地理學界は一言にして盡くせば前數年の連續なり世界大戰並に改造問題の斯學に及ぼせる影響は愈深刻を加へ地文學に於ては戰時中飛行術の急速なる發達は飛行寫眞術を用ふる地形學研究法の勃興を促しデーヴィス、ペンク兩氏に於てクライマックスに達せしかの觀ある地形學に新生命を與へんとし政治地理に於ては聯合國と同盟五國との條約が此年に於て相次で調印又は批准せられ從つて講和條約の地理學的研究は本年中の最大問題となり經濟地理に就ては石油が動力資源としての價値愈重きを加へたるが爲め英米の二大海軍國は世界の油田を兩分して各其一を保たんとし從つて石油に關する論攷の漸く盛なるを見るべく飛行術の進歩は前年に於て已に大西洋横斷に成功して世界を驚倒せしめたるが此年には阿弗利加縱貫、英濠連絡、羅馬東京間等の大飛行の決行せらるゝありて嘗に交通上に革命を起したるのみならず地形學、航空圖、高層氣象學等の發達に貢獻したる所尠からず戰時中絶したる國際的の學會も漸く復活の機運に向ひ白耳義ブラッセルス國際調査會には其一部として「國際測地及び地球物理學研究部」の設けらるゝあり八月には布哇ホノルルに於て「汎太平洋學術會議」の第一回の會合あり太平洋周邊諸國の學者相會して人類學生物學地理學地質學等を共同討究せんとせるもの本邦よりは地理學界の代表者として山崎直方氏出席せられたり探檢界の振はざるは大戰の影響として止むを得ざることなるべく本年に於ては纔に那威のナンセム氏が北極洋を航行して西比利亞に在る聯合國の俘虜を過激派より救ひ出したること曩に北極探檢に赴きたる那威のアムンゼン氏がマウド號にて七月二十七日無事アラスカのノーム・シチーに歸着しマンモス齒及び多數の鳥類の標本を持ち來りしことを擧ぐべきのみ。これに對して本邦の地理學界を見んか吾人は其業績の振はざるに忸怩たらざるを得ず幸にして帝

國學士院の事業として「學術研究會」創設せられ、「地理學」も其一部として斯學先輩の之に列るあり、吾人は其將來に囑望するものなり。若し夫れBernhard Perthes（獨、前年十二月）Robert Edward Peary（米、四月）Alexander Supan（獨、七月）Benjamin Smith Lyman（米、八月）Ludwig Loozy（洪、十月？）和田維四郎（十一月）諸氏が相次で其鄕國に於て遠逝せるは學界の等しく悼惜する所なりペルテス氏はゴータのユスツス・ペルラス社を主宰し多年世界最良の地圖を出して學界に貢獻したる人ペアリー氏は北極探檢家として盛名を馳せ曩に氷雪に鎖されたる北部グリーンランドを横斷し一九〇九年には學界多年の懸案たる北極に到達して其深海なることを確めしは今尙ほ世人の記憶に新なる所なるべしズーパン氏は早く地學雜誌として世界的名聲を博せるPetermanns Mitteilungen を主宰しブレスラウ大學教授として地理學講座を擔當し前にGrundzüge der physischen Erdkunde(1893) を出し地文學の新歸向を示して全世界に愛讀せられ Die territoriale Entwicklung der europäischen Kolonien(1906) によりて政治地理學に於ける其造詣を世に問ひ近年中風を患ひて病

床にありしも尙ほ "Leitlinien der allgemeinen politischen Geographie"(1918) を公にして學界に貢獻したるが此書を絕筆として終に逝くライマン氏は明治五年本邦に來り北海道の地質調査に從ひ其炭田を踏査し豐富なる白堊紀アムモナイト化石を世に紹介し次で本邦油田調査の先驅をなし或は後進技術者を養成し明治の初期諸事草創の際に於て今日の石炭石油鑛業の基礎を作りし人本邦學界の永く記憶すべき一人なり今や八十餘歲の天壽を全うして逝くローチー氏は洪牙利地質調査所創立以來の所長たり一八七七—八〇年同國貴族 Bela Szechnyi 伯に隨ひて支那探檢に從事し漢口より藍關に秦嶺を越ゑて西安に出で六盤山を越ゑて燉煌に至り中部崑崙を踏査し岷山を越えて四川に出で西藏に入らんとし拒れて巴塘より引き返し雲南よりビルマの巴莫に出でたり此大旅行の報告書三卷中の第二卷は實にローチー氏の研究を錄す今や敗殘の故國に逝く悲しい哉和田維四郎氏は本邦地質學界の先輩にして初期の地質調査所長となり多くの地質圖又は土性圖を著し後製鐵所長官となり桂冠後專ら古書を蒐め後進を誘掖して倦む所を知らざりしなり更に各部門に分ちて學界

一年の業績を回顧せん

地形學に於ては前述の如く飛行寫眞術應用の提唱せらるゝありて Method of Aerophotographic Mapping (Moffit, The Geographical Journal) の如き其の撮影法並び寫眞機の選擇法を敎へ Airplanes and Geography (Lee, Geographical Review) は其の地形學研究に必要なる所以を詳述し Flugzengphotographie in Dienste der Geographie (Ewald, Petermans Mitteilungen) も其應用法を述べ Geographical Reconnaissance by Aeroplane Photography (Hamshaw Thomas, The Geographical Journal) は著者が大戰中バレスタイン戰線に從軍して親しく研究したる方法の發表なり「武藏野の地形」鳥居龍藏、東亞の光)は武藏野全體が臺地にて其中に古き地質時代の谷ありて波狀を呈し恰も東部西比利亞滿洲に比較すべきものなりと云ひ「日本の火山」(小林房太郎)は日本の火山の構造、分布等を述べたる一種の火山集誌と云ふべく「阿蘇山の活動に就て」(大森房吉、東洋學藝雜誌)は同山噴火の歷史を叙し同山は約二八〇又は二七〇年を週期として頻繁なる活動をなすもの、如しと云ひ「大正三年噴出新硫黃島消失經路」(脇水鐵五郎、同誌)は大正三年一月噴出したる新硫黃島の消失は東北岸より來る波浪の食岸作用の爲なりと說き「新潟縣西山油田油井内の温度」(堀田又男、地質調査所報告)は大正三年十一月同縣刈羽郡中川村字伊毛に於て千四百九米の深井内にて地温を測定せしに平均二十三米六七を下る毎に攝氏一度を增す割合にて井底にては千三百八十六度の高温に達したることの實驗報告にて他の温帶地方にては大抵三十米を下る毎に一度を增す割合なるに火山國なる本邦は比較的地下淺所に於て已に高温に達するを知る兎に角かゝる實驗の少かりし本邦に於ては興味あることゝ云ふべし「鳥取縣三朝温泉」(山根新次、地學雜誌)はラヂユーム温泉として名高き同温泉の泉量の減少を濫撈の結果なりとし地質上より其の保護法を說き "The Islands and Coral Reefs of Fiji" (Davis, The Geographical Journal) はフイジ島を例として氏の多年の珊瑚礁成因說を說明せるもの、「浦塩附近の地質」(門倉三能、地學雜誌)は、同市附近を調査して、凡て中生代珠羅紀層及び之を貫きて噴出せる岩より成ることを明にし、「泉の話」(佐藤傳藏、同誌)は泉の成因を通俗的に說述し、「内蒙古及び奉天附近の砂

丘」(新帶國太郎、同誌)は、滿洲鄭家屯附近の砂丘を說明する積ならんも、寧ろ一般砂丘の成因を記述せり、

天文學に就ては「星雲說に就て」(國枝元治、地學雜誌)が、ジーンス氏の新說を紹介したる外、特に見るべきものを聞かず。

地圖學に於ては、"The Times Survey Atlas of the World" (Bartholomew) の出版は英國製圖學の進步を示す新記錄として世界に誇るに足るべく "Surveys in Mesopotamia during the War"(Beazel y; The Geographical Journal) は著者の世界大戰中メソポタミヤに於ける測量の經過を述べしもの東京地學協會が「南支那全圖」「南支那地質圖」(以上二百萬分一)「東部西比利亞鑛物分布圖」(四百萬分一)を公にしたる亦學界の慶事たるを失はず世界改造に關聯して大形掛圖の新に出版せられしもの富山房、三省堂、外交時報社等のもの特に見るべし。

氣候氣象學に就ては「立山の氣象觀測談」(中村左衞門太郎、地學雜誌)は立山の氣象狀態を述べ特に山脈の雨量に及ぼす影響を詳にせしもの「氣候の新分類法に就て」(佐藤傳藏、同誌)は Dr, Köppen の氣候帶六分法を紹介し "Die Lufttemperatur an der Schneegrenze" (Köppen, Petermanns Mitteilungen) は雪線に於ける年平均、最暖月平均、最寒月平均等の氣溫を研究し、"Wandering Storms" (Mc Adie. Geographical Review) は旋風系が從來信ぜられし如く海流に從ひて拋物線狀の徑路を取るものにあらずして其徑路の極めて複雜なる狀況を述べ從來の學說の根幹を動かさんとす

人文地理學一般に就ては「南米の大西洋沿岸」(宮崎幹之助、地學雜誌)はブラジル地方の視察談にて日本移民の狀態をやゝ詳述せしもの「氣候の輪廻と人類の進化」(小林房太郎譯、同誌)は第三紀以後に於ける氣候の週期的變化が人類の體質容貌色素文化に及ぼせる影響を述べ「バルカン半島の自然區劃」(同人譯、同誌)は半島を氣候地中海的にて漁業航海の盛なる希臘區、穀物橄欖實り、ビザンツ文化の跡を存するスレース區、大陸的氣候にて小麥の產多きダニューブ高原、氣候ステップ的にて農產多きマリツツア河谷等に分ち「氣候と人文」(遠藤金英、歷史と地理)は氣溫溫度等が人類の體質精神に及ぼす影響を考へしもの "Angrezungen zu kunstgeographischen Studien"

(Pouten, Petermanns Mitteilungen) はストリゴウスキーの建築材料美術品などより民族住地の地理的條件を考定する新方法を紹介したるものなり

居住(聚落)地理學に於て「都市の地理學的觀察」(橋本辰彦、歴史と地理)は都市を發達の原因により分類考察せしもの「都市の歴史的觀察」(同人、同誌)は時代により都市發達の理由の異なれるを記し「聚落の高度」(同人、同誌)は聚落の發達と海拔高度との關係を述べ "L'habitation rurale en France"(Demangeon, Annales de Geographie) は農村の形式を研究したるもの "Some Types of Cities in Temperate Europe"(Fleure, Geographical Review) は巴里盆地の都市、カセドラルを中心とせる都市、アレマンニ及びフレミッシ境界の都市、獨逸の町、東歐の町等が各特有の形式を有することを述べ "The arrangement of rural populatio" (Geographical Journal, Auroussean) は主に佛國の農村を例として其の形式を論じたるものなり

人種學方面にては「米國の有色人種」(村川堅固、地學雜誌)は同國にて日支人、黑人、インヂアン等が如何なる待遇を受けつゝあるかを述べ「土俗學上より觀察せる黑龍江畔の民族(鳥居龍藏、人類學雜誌)は大正八年著者が同地方に出張調査せる通古斯、オロチョン、ブリヤート等諸民族の土俗を紹介し Der Mensch im südafrikanischen Veld(Leo Weibel, Petermanns Mitteilungen) は南阿の民族、ブッシュメン、ホッテントット、バンツー、オバンボス、ヘレロス、ブール等の分類、人類學的特質を詳述したるものなり

而て政治地理方面を見んか昨年一月十日對獨 Versailles 條約、七月十六日(日本は十月十三日)對墺 St. Germain en Laye 條約、八月九日對勃 Neuilly sur Seine 條約、十一月十四日對洪 Grand Trianon 條約相次で批准交換を了し對土 Sèvre 條約亦た八月十日調印せられ多年アドリア海問題に確執したる伊塞兩國も十一月十二日 Rapallo 條約を締結して勢力圏を協定し殖民地を失へる獨逸は政治地理學研究所 Forschunginstitut für politische Geographie を創立し地誌、人種學、國家地理學の各部門を設け所謂 Weltpolitik を研究して將來殖民帝國捲土重來の基礎を作らんとする企あり隨て此等問題に關する内外の論文甚だ多くヴエルサイユ、サンジエルマン兩條約本文は本邦に

ては早く外務省並に朝陽會より單行本として發行せられ「獨逸國境の地理的考察」(山崎直方、東亞の光)は獨逸は南方はアルプス、エルツ等の山脈によりて民族的發展を阻止せらるゝも東西兩方面には自然的國境を缺けるが爲め講和條約に依て此兩方面に國境の移動を生ぜりとして其地形を述べ「獨逸の東境、スラヴ民族の西進」(齋藤清太郎、東亞の光)は獨逸波蘭國境移動の歷史的變遷を述べ「獨逸領土變更の意義」(石橋五郎、史林)は其理由を民族主義歷史尊重主義自由交通主義賠償主義國際聯盟主義にありとし "Question du Rhin"(Blondel, La Géogrephie)はライン問題の由來を說明し "Die polnische Korridor im Gebiet der Provinz westpreussen" (Geisler, Geographische Zeitschrift)は西普魯西州の民族分布を論じ "Ergebnisse der Volksabstimmung in Nordschleswig." Petermanns Mitteilungen)はシュレスウイッヒの人民投票の結果につき其の民族分布の狀態を記し "Germany's Lost Pacific Empire" (Churchill, Geographical Journal)は獨逸が太平洋殖民地獲得の由來を述べ "Das Schicksal der deutschen Kolonien" (Marquardsen, Petermanns Mitteilungen)は獨逸殖民地の歷史を叙し "Siebenbürgen Sachsen in ihrer Geschichtlicher Entwickelung"(Reissenberger, Petermanns Mitteilungen)は今回羅馬尼亞領となりしトランシルバニアの獨逸人繁殖の由來を述べ "Germany's Lost Colonial Empire"(Harris)は獨逸が如何に拙劣に殖民地を統治したるかを述べ「世界改造の地理學的考察」(下田禮佐、歷史と地理)は改造後の世界地理概觀にして未だ完結に至らず「大英帝國の將來」(稻田周之助、外交時報)は英國は從來印度をパースナルユニオンとせしが今は印度は自治領たらんとし自治領は英國とコンモンウエルスを作らんとし大英帝國は將來 Staatenbund たるべしと推測し「中央歐羅巴の新形勢」(米田實、同誌)は墺地利とチエコスロバキアの關係を說き「波蘭共和國」(西田與四郎、地學雜誌)は同國成立の由來沿革を說明し「波蘭と東部ガリシア」(米田實、外交時報)はルテーヌ人の住地たる東部ガリシアが二十五年間波蘭委任統治に決したることの正當なるを論じ「波羅的沿海諸國最近事情(石川實、同誌)はリスアニア、ラトヴイア、エストニア三國と過激派露西亞との關係を述べ「スピツツベルゲンの處分に就て」(米田實、同誌)は北極洋

洋中の同島が講和會議によりて那威領と決定したる經緯を記し「ジョルジア共和國」(吉川潤二郎、同誌)は高加索山南に生れたるジョルジア民族の國の地理を說述し「外交上より見たる波斯」(遠藤憲治、同誌)は近世英露爭覇場としての波斯外交紛糾の顚末を詳述して大戰の混亂に乘じて英國が多年の野心を滿足せしめたる次第に及び「我が領內ヤップ島の運命如何」(小藤文次郎、東洋學藝雜誌)は同島が海底電線中繼所として重要の地位にあることを說きたり

經濟地理に就ては大戰の終熄と共に食糧問題勞力問題は漸く影を潛め反對に人口過剩、新マルサス主義等の盛に上下せらるゝあり而して其中心は依然として鐵及び動力問題にあるが如く原料の全然缺乏せる我が國に於て鐵以外の原料に就て全く之を言ふ者なきは已に大戰中の苦き經驗を忘れたるによるか「經濟地理上より見たる戰後の世界」(寺田貞次、史林)は世界大戰後の世界が依然鐵石炭の時代なりとし「歐羅巴特に佛獨に於ける大戰後の鐵及石炭」(井上禧之助、地質調査所報告)は大戰後に於ける炭田及び鐵鑛地の領屬狀態を記し「人民投票によりて獨波何れかに屬すべき上部シレジアに於ける鑛物富源」(木尾生、地學雜誌)は同地に於ける石炭、亞鉛、鉛等の分布狀態を述べ「ペルシャの油田」(小林儀一郎譯、同誌)は同國油田の分布地質を說き其豐富なることを說き「戰後は石油の時代なり」(小藤文次郎、東洋學藝雜誌)は石炭は水陸の動力として重要なるも空界は石油の獨占場なりとして今後石油の重要なる所以を述べ「戰後英米の石油戰爭」(同人、同誌)は世界の兩大海軍國の石油田爭奪戰の狀況を論じ「石油工業に關する今後の問題」(秋元不二男、地學雜誌)は石油の集約的利用法を說き「世界に於ける動力源」(井上禧之助、同誌)は石炭石油水力資源の賦存量、並に將來の推測を揭げ「北極圈內にある世界の大鐵山」(同人、同誌)は瑞典のキルナヴァラ、グレヴァレ兩大鐵山のことを述べ「東部西比利亞の鑛床」(瀨沼恪三郎譯、同誌)は露國地質調査所東洋部長アーネルト氏の調査せる極東及びサハレンの石炭、金等の分布狀態を紹介し「與板油田」(千谷好之助、同誌)は越後與板油田の地質を第三紀層上中下部に分ち石油は下部頁岩中にあることを明にし「膽振國鐵鑛床に就て」(清野信雄、地質調査所報告)は同國各地の

山の斜面又は臺地にある褐鐵鑛床を以て凡て鑛泉の沈澱に由りて生ぜしものと論じ「諏訪の鐵鑛」(佐藤傳藏、地學雜誌)は信州諏訪郡北山村の沼鐵鑛を踏査して其賦存量約百六十萬噸なりと推測し「智利及勃里比亞に就て」(牧野孝三郎、同誌)は兩國の鑛業特に智利の硝石、石炭、鐵鑛勃里比亞の銀錫の鑛業の事を述べ「我が國に於ける木材利用の現況」(望月常、同誌)は本邦に三千五百萬町の林野あり之に造林せば年に三億五千萬石の材を得べし然るに當今年伐採額一億五千萬石に過ぎざるに尙ほ森林過伐の傾向ありとて森林經營の急務なるを論じ「東亞露領海岸に於ける漁業狀況」(越田德次郎、同誌)は同地日本人の漁業狀況を述べ「膃肭獸に就て」(北原多作、同誌)は膃肭獸の習性分布獵法を述べ「窒素資源供給の現在及び將來」(秋元不二三、同誌)は化學工業原料として將來は空中窒素固定が最も重要なることを說けり

交通に於てはImperial air Rautes(Sykes, The Geographical Journal)は大英帝國の航空路として本國と殖民地間の連絡を如何にすべきかを說明し英濠連絡、大西洋橫斷、加奈陀橫斷、阿弗利加縱貫等の航空路を詳述し「交通の地

的研究」(西龜正夫、歷史と地理)は通路鐵道等が地理的條件と如何に關係せるかを說明せり

地誌に於ては省別支那全誌(東亞同文會發行)が本年を以て完成したるは學界の爲に欣慶に堪へざるなり同書は多數報告書の集成にて一部の著述とは云ひ難きも兎に角邦人の手にて彼の如く大部分のものを完成したるは吾人の意を强うする所なり「溫泉案內」(鐵道院發行)は鐵道院線附近の著名なる溫泉の案內記と云ふべく「現在の臺灣」(東洋協會、昨年より每年發行)は臺灣の沿革風俗地理產業等を叙し總督府發行の「臺灣事情」と相埃つて同島の現狀を知るの栞となり「尼港附近の地形と交通」(中尾淸藏、地學雜誌)は露領ニコライエフスク港附近の地勢及び交通狀態を說明し "La nouvelle Hongrie", Eisenmann, Annales de Geographie)はトリアノン條約による新洪牙利を研究して面積九萬一千方粁、人口七百四十萬人と推定し特に今後同國の穀物畜產鑛產其の他の產額統計を推測して詳細を極めたり

探檢記にては「西藏遊記」(靑木文敎)は著者が一九一二年より一七年まで數年間西藏滯在の報告書とも云ふべく

西藏の風俗宗教等を見るに便なり "Southern Tibet"(Sven Hedin) は一九〇六—八年に於ける氏の第三回の探檢報告にてトランスヒマラヤ大山系、インダス、サトレヂ、ブラーマプトラ三大河源發見の次第を詳述し The Story of Shackleton's Last Expedition"(Shackleton) は一九一五年氏の南極大陸横斷探檢の記載なり。〔下田〕

彙報

●京都帝國大學文學部史學科大正十年度講義題目

史學研究法	二	坂口教授
國史概說(中世及近世)	三	三浦教授
中世の都市	二	
近世社會政策(演習)	一	
古文書學總論及實習	二	
國史概說(古代)	二	喜田教授
國史地理	二	
史籍講讀並解題	一	
東洋史概說(中世)	二	桑原教授
支那人の風俗に關する研究	二	
東洋史概說(古代)	二	内藤教授
支那史學史	二	
東洋史概說(近世)	一	矢野教授
近世の外國關係	二	
東洋史演習	一	